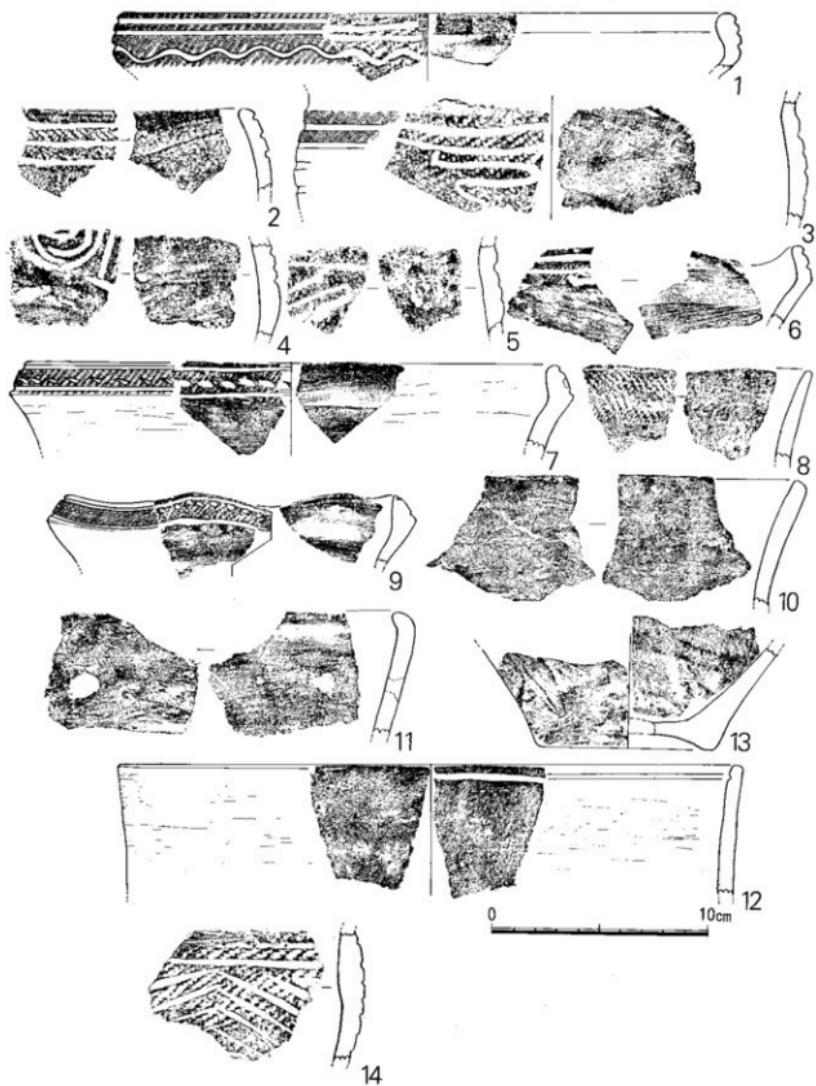
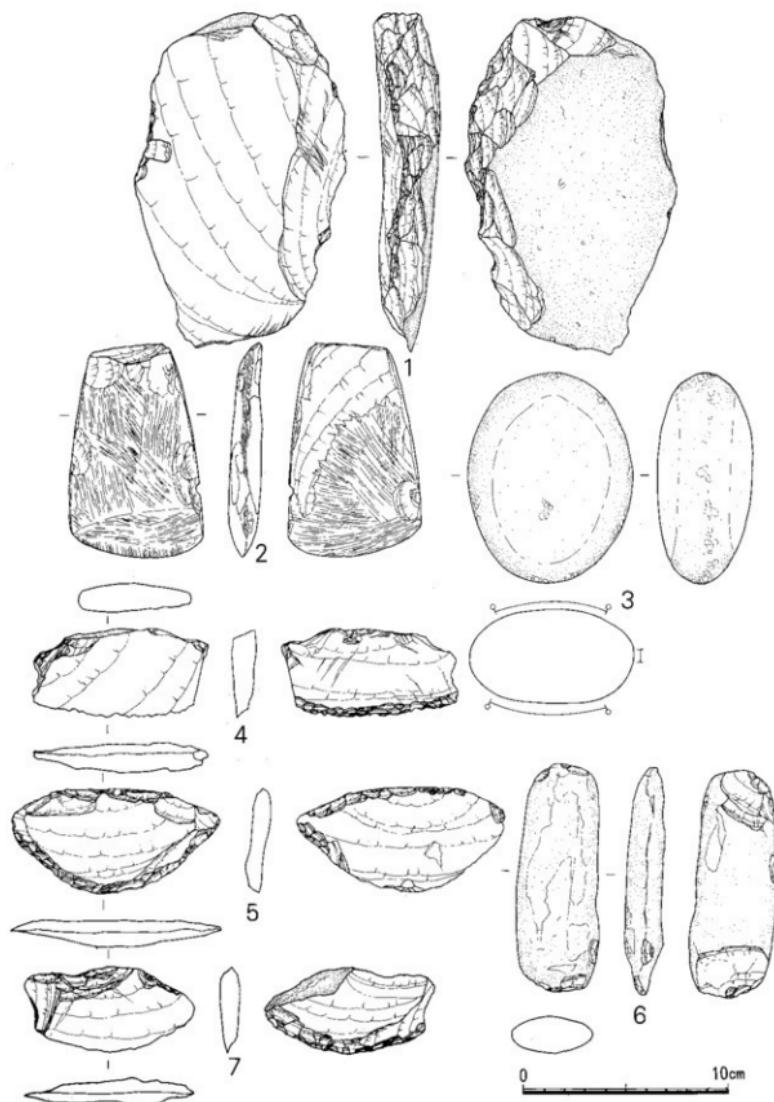


第158図 第18号配石遺構実測図



第159図 大宮・宮崎遺跡C-3区出土土器



第160図 大宮・宮崎遺跡C-3区出土石器

大宮・宮崎遺跡C-3区出土土器観察表(第63表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第159図1	表採	深鉢口縁部	28	赤褐色 繩文L R	赤褐色 横撫で滑らか	細長 砂石粒	良好
2	5	浅鉢口縁部	25	灰茶色 繩文R L	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	3	深鉢胴部	22	黄赤褐色 繩文L R	赤褐色 横撫で滑らか	長金雲母粒	良好
4	20	深鉢胴部	40	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	長石英粒	良好
5	15	深鉢胴部	24	灰茶褐色 繩文L R	灰茶褐色 撫で滑らか	長大 石粒砂	良好
6	表採	深鉢口縁部	28	暗茶褐色、繩文L R、 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂石粒	良好
7	114	深鉢口縁部	27	黄褐色、繩文L R、 撫で滑らか	灰黒色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
8	8	深鉢口縁部	28	灰茶褐色 繩文R L	灰茶褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
9	表採	深鉢口縁部	13	暗赤褐色、繩文L R、 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
10	9	深鉢口縁部	37	黄茶褐色 撫で滑らか	黄茶褐色 撫で滑らか	細長 砂石粒	良好
11	112	浅鉢口縁部	23	黄茶色 横撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	細長 砂石粒	良好
12	1	深鉢口縁部	29	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	長石 雲母粒	良好
13	100	底部	8.5	茶褐色 撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	細砂石粒	良好
14	表採	深鉢胴部	30	黒褐色 繩文L R	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒・長石 粒・金雲母粒	良好

大宮・宮崎遺跡C-3区出土石器観察表(第64表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第160図1	120	石材核	16.4	10.3	3.4	513.30	頁岩	片面全面に自然面残す
2	48	磨製石斧	10.4	6.5	1.8	148.33	頁岩	全面研磨、完形
3	表採	磨石	10.3	8.0	4.6	527.39	砂岩	橢円形繊維素材、中央両面研磨痕
4	表採	スクレイバー	4.3	8.5	1.5	56.79	頁岩	横長剥片素材、片面加工刃部形成
5	表採	スクレイバー	5.1	10.2	1.3	56.34	頁岩	横長剥片素材、外湾刃形成
6	表採	打製石斧	11.1	4.2	1.9	121.88	頁岩	完形一部に自然面残す、刃部片面加工
7	116	スクレイバー	4.2	8.3	1.4	35.63	頁岩	

石器（第160図）

石材核（第160図1）

大型の楕円形礫を半裁し板状となったもので、片面には第一次剥離面を、一方の面には自然面と共に幅広くとどめている。打面は片側面に持ち、片面には小型横長剥片剥離痕を、一方の面には大型横長剥片剥離痕を残している。

磨製石斧（第160図2）

頁岩の大型剥片素材で、全体形は撥形を呈し、側面は真直で、身はやや肉薄く扁平である。両面、側面共に良く研磨され、特に刃部は入念で外湾する鋭利な刃先を作出している。

磨石（第160図3）

楕円形を呈する砂岩礫素材で、上面の平坦面に滑らかに磨耗した使用痕をとどめている。

スクレイバー（第160図4・5・7）

3点は總て横長剥片素材で、(4)は鋸齒状となる直線的な刃部を長軸一辺に片面加工によって作出している。(5)は木葉形を呈し、長軸の二辺に外湾する刃部を持ち、一方の刃部は強く外湾させ特徴的である。(7)は背面の一部に自然面を残し、刃部は長軸一辺に粗く片面加工によって外湾する鋭い刃先を作出している。

打製石斧（第160図6）

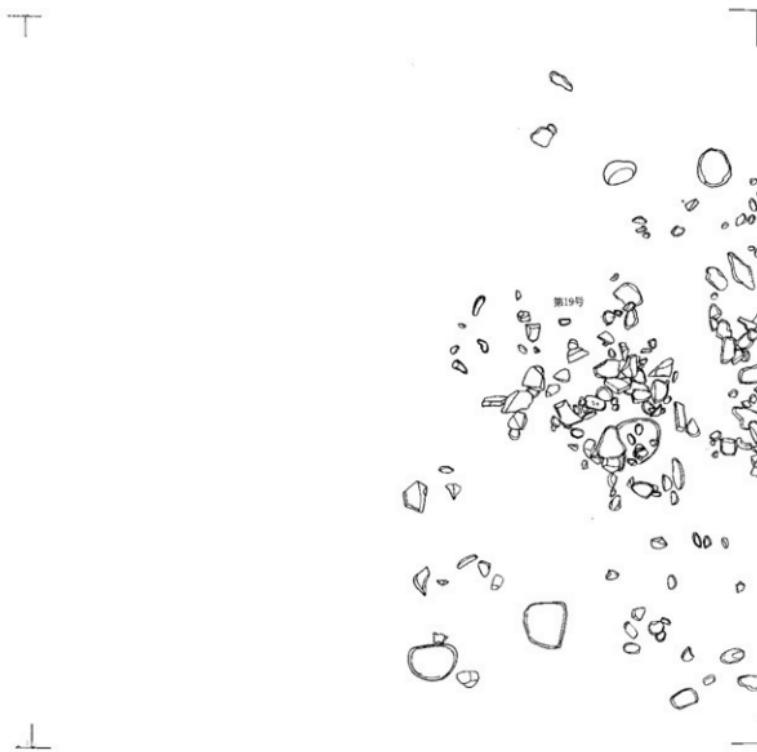
長楕円形を呈する扁平自然礫を素材とし、加工は頭部にわずかな打ち欠きと、刃部は両面に打ち欠き加工がみられ、鋭い刃先を作出するが、全体的には加工が乏しく作りの雑な粗製品である。

(18) C-4区の遺構と出土遺物

遺物はあまり多くはないが、本地区のはば全域に散在的に分布する。土器、石器共に半々の出土状態を示し土器には第4D類土器を主体とし、石器は石材核、石鎌、スクレイバーなどがみられる。遺構としては本区の北半部に配石遺構1基が検出されている。これのすぐ北側に接し第18号配石がある（第161図）。

第19号配石（第162図）

先の第18号配石同様、良好な遺構ではない。楕円、円形を呈する扁平自然礫を直径1.4mの範囲に雜然と配置したもので、やや中央寄りに直径約30cmを測る円形扁平自然礫1個が置かれている。この石を中心とし、直径10cm前後の礫約40個が散在する。この礫の中には叩石1点と石材核1点が組み込まれている。本配石内からの遺物は第4D類土器が多く深鉢口縁部片2点、胴部片1点と第4B類深鉢胴部片1点がみられる。近辺からの遺物も第4D類土器に限られ、深鉢口縁部片4点と胴部片1点の出土がある。



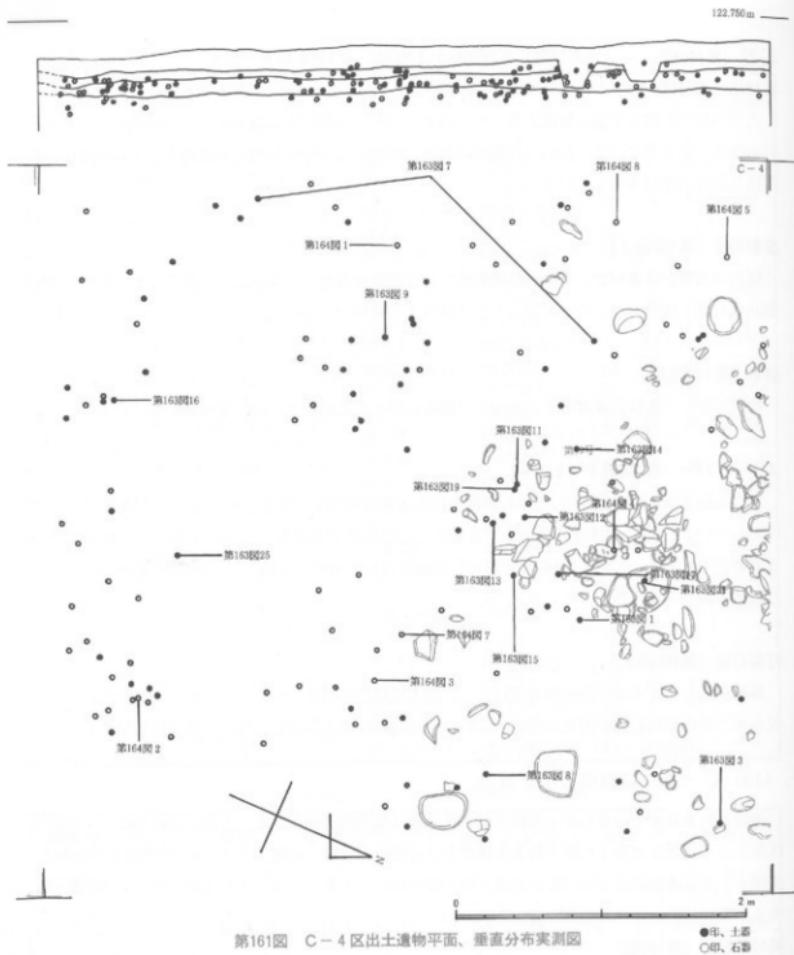
第161図 C-4区出土遺物平面、垂直分布実測図

土器（第163図）

第4B類（第163図17・18）

共に深鉢の胴部片で、器壁は緩く膨らみ外面には（17）が重弧文を粗く描き、（18）は平行横直線3条と下位に1条が巡り、その沈線間に継位に2列刺突列点文が施されている。これの沈線は太く深く施文されている。

第4C類（第163図25）



第161図 C-4区出土遺物平面、垂直分布実測図

●土器
○石器

土器（第163図）

第4B類（第163図17・18）

共に深鉢の胴部片で、器壁は緩く膨らみ外面には（17）が重弧文を粗く描き、（18）は平行横直線3条と下位に1条が巡り、その沈線間に縦位に2列刺突列点文が施されている。これの沈線は太く深く施文されている。

第4C類（第163図25）

1点の資料で深鉢の胴部片である。胴上部に幅広い横帯状の文様帯を持ち、2条単位の平行横直線文を上下に描く中央に傾斜の緩い逆三角形文を描き構成する。地文の繩文は小粒で、沈線末端に刺突文を持つ。

第4 D類（第163図1～8・11～16・19・21・22）

本地区主体の土器で3点の浅鉢の他は全て深鉢である。深鉢は平口縁を主とし波状を呈するものが2点含まれている。深鉢波状口縁（3・13）は共に波頂部を欠損するもので、頸部は緩く外反し、「く」字状に内折さす口縁は立ち上がりが短く端部は（3）が丸みをなし（13）は尖る。外面には繩文LRが施され、その面に2条の平行沈線が口縁に沿って巡らされるが、（13）には2条沈線間に1条の短直線が引かれ、その沈線の末端に小さく勾玉状の刺突文が付されている。他の平口縁は、外傾さず長い頸部から「く」字状に内折さす口縁を持つが、その立ち上がりはどれも短く萎縮し、端部は尖るものが多い。外面には繩文LRが施され、その面に2条～3条の平行沈線が描かれ、沈線間に斜行刻目文を連続施文するもの、沈線の溝の中に穀粒状の列点刺突文を施すもの、沈線末端に穀粒状・勾玉状の刺突文を左右対向するものなどをみる。胴部も斜行刻目文を上下2段重ねに4条の平行横直線間に施文している。浅鉢（4・6・22）、緩く「く」字状に内曲させ端部は丸みをなす。外面には（4）が繩文LRを、（6）は無文地となり、両者には3条の平行横直線が描かれている。（22）は緩い波状口縁を呈し、外面に繩文LRが施され、その面に口縁に平行する細沈線2条が描かれ、沈線間に斜行沈線もみられる。

第4 E類（第163図9・20）

（9）は深鉢の胴部片で、器壁は緩く膨らみ、外面には幅広く小粒の繩文LRが施されている。（20）は平口縁となる浅鉢で、器壁は緩く内曲し、端部は丸みをなす。外面には口縁に平行し1条の沈線が引かれ、その沈線に接し幅広い繩文LRが施されている。

第5 C類（第163図10・23）

（10）は深鉢の口縁部片で、器壁は強く外反し、端部は平坦面を持つ。（23）は浅鉢の口縁部片で、器壁は薄く、緩く内湾し端部は内曲させ尖っている。

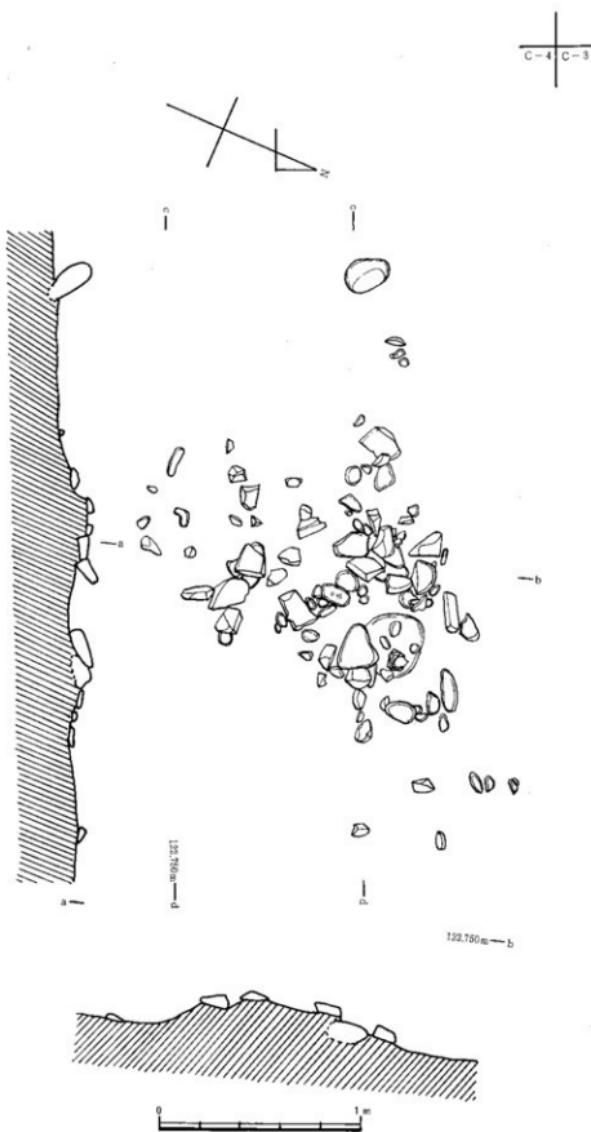
石器（第164図）

石材核（第164図1・2）

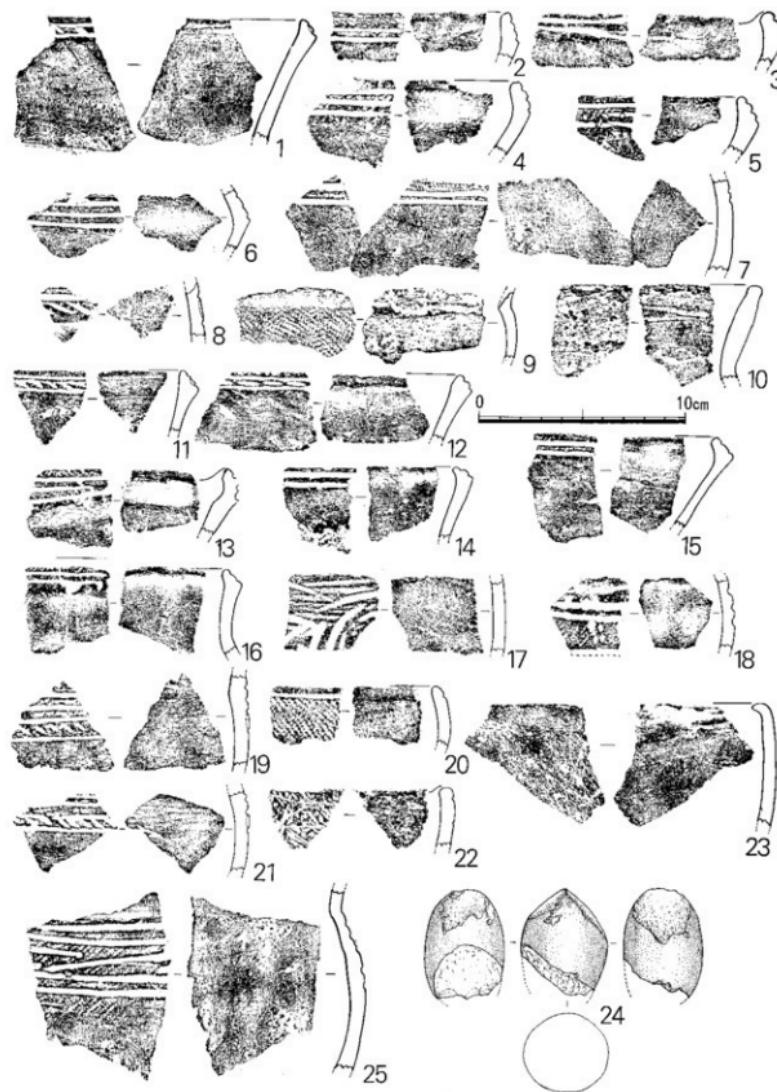
分厚で扁平な大型剥片素材で、（1）は椭円形、（2）は菱形を呈し、両者共に片面に自然面を幅広くとどめ、一方の面には周縁より剥離された横長剥片剥離痕を全面に残している。

叩石（第163図24、第164図4）

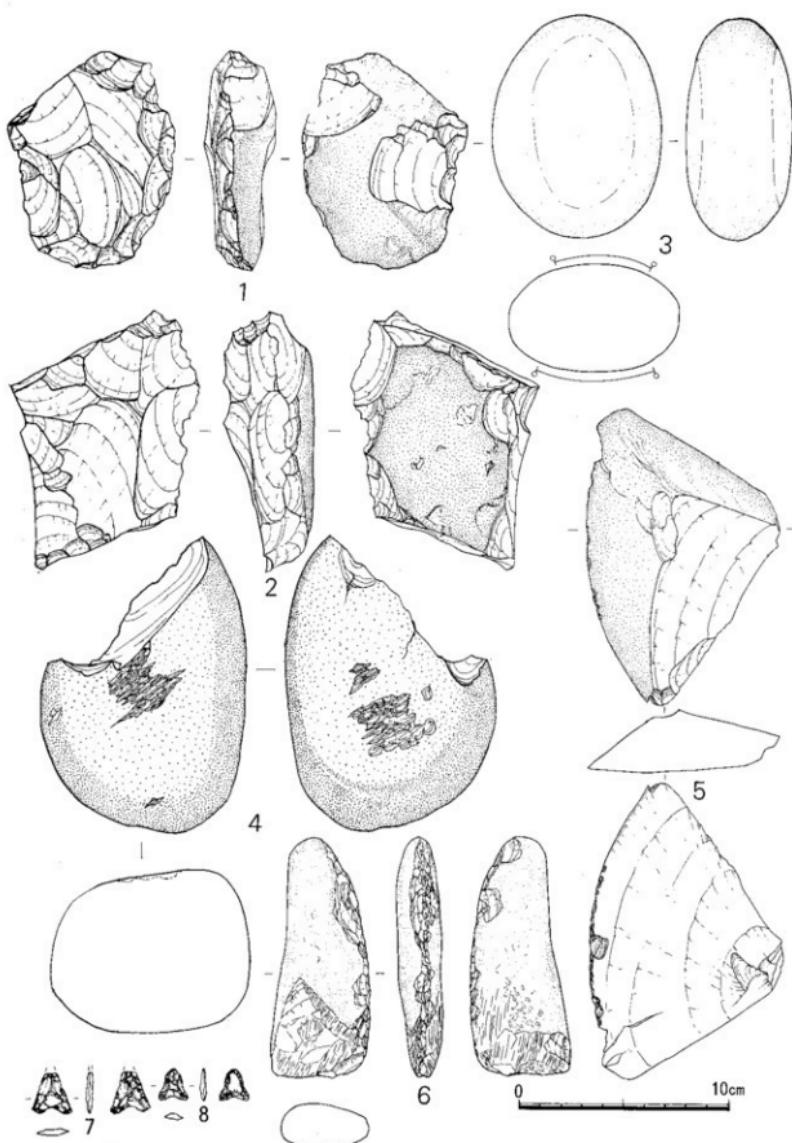
第163図（24）は小型で、卵形をなす砂岩礫素材で、断面形は円形を呈している。片端部を欠損し、一方の端部の両側面に激しく使用された磨耗痕をとどめ、使用面の中央部が三角形状に尖っている。第164図（4）も片端部の一部を大きく欠損している。全体形は分厚な椭円形を呈する砂岩礫素材で、使用痕は、平坦面を持つ上面の中央両面に粗く凹みを作り残されている。



第162図 第19号配石遺構実測図



第163図 大宮・宮崎遺跡C-4区出土土器・石器



第164図 大宮・宮崎遺跡C-4区出土石器

大宮・宮崎遺跡C-4区出土土器観察表（第65表）

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎 土	焼成
				外 面	内 面		
第163図1	120	深鉢口縁部	28	暗茶褐色 横撫で滑らか	灰黄色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	表採	深鉢口縁部	26	灰茶褐色 縄文RL	灰茶褐色 撫で滑らか	細砂石粒	良好
3	118	深鉢口縁部	25	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
4	表採	浅鉢口縁部	25	灰茶色 色縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂石粒	良好
5	表採	深鉢口縁部	25	灰茶褐色 縄文LR	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
6	表採	浅鉢口縁部	21	灰茶色 撫で滑らか	淡茶色 撫で滑らか	金雲母粒 長石粒	良好
7	78 90	深鉢胴部	20	淡黄茶色 縄文RL	淡黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好
8	116	深鉢胴部	?	黒褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	80	深鉢胴部	25	淡黄色 縄文RL	淡黄色 横撫で滑らか	長大石粒 砂	良好
10	表採	深鉢口縁部	25	灰茶色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂石粒	良好
11	74	深鉢口縁部	23	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
12	123	深鉢口縁部	30	暗赤褐色 撫で滑らか	暗赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
13	61	深鉢口縁部	26	淡茶褐色 撫で滑らか	淡茶褐色 撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
14	132	深鉢口縁部	26	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
15	6	深鉢口縁部	22	暗茶褐色、縄文 LR、撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
16	126	深鉢口縁部	22	赤褐色 縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細砂石粒 長石粒	良好
17	3	深鉢胴部	33	茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
18	表採	深鉢胴部	33	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂石粒 長石粒	良好
19	137	深鉢胴部	32	灰茶色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
20	表採	浅鉢口縁部	21	黄灰色、縄文 RL、ヌス付着	黄灰色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
21	5	深鉢胴部	23	赤褐色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂石粒 長石粒	良好
22	表採	浅鉢口縁部	20	黒褐色 縄文RL	黒褐色 撫で滑らか	細長石粒 砂	良好
23	表採	浅鉢口縁部	38	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
25	88	深鉢胴部	27	黄褐色 縄文LR	黄褐色 撫で滑らか	長細石砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡C-4区出土石器観察表（第66表）

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第163図24	表採	叩 石	5.3	3.8	4.3	90	砂 岩	約3分の1欠損。 火に焼け赤変。
第164図1	21	石 材 核	10.4	8.0	3.4	260	頁 石	片面に自然面残る。剥離面鋭利
2	111	石 材 核	12.3	9.0	4.2	500	頁 岩	片面中央に自然面残る。剥離面鋭利
3	107	磨 石	10.5	8.1	5.1	622.79	砂 岩	椭円形礫素材。 中央両面に研磨痕残る
4	152	叩 石	14.0	9.7	7.6	1280	砂 岩	椭円形礫素材。 一部欠損。
5	56	スクレイバー	9.3	14.3	2.9	300	頁 岩	大型横長剥片素材。 片面に自然面残る。
6	表採	打製石斧	11.4	41.8	2.2	155.11	頁 岩	両面に自然面幅広く残す。
7	26	石 鐵	1.9	1.9	0.3	0.82	サヌカイト	先端・両脚端欠損
8	9	石 鐵	1.5	1.4	0.3	0.44	サヌカイト	完形

磨石（第164図3）

分厚な椭円形をなす砂岩礫素材で、中央部の両面に滑らかに磨耗した使用痕をとどめている。

スクレイバー（第164図5）

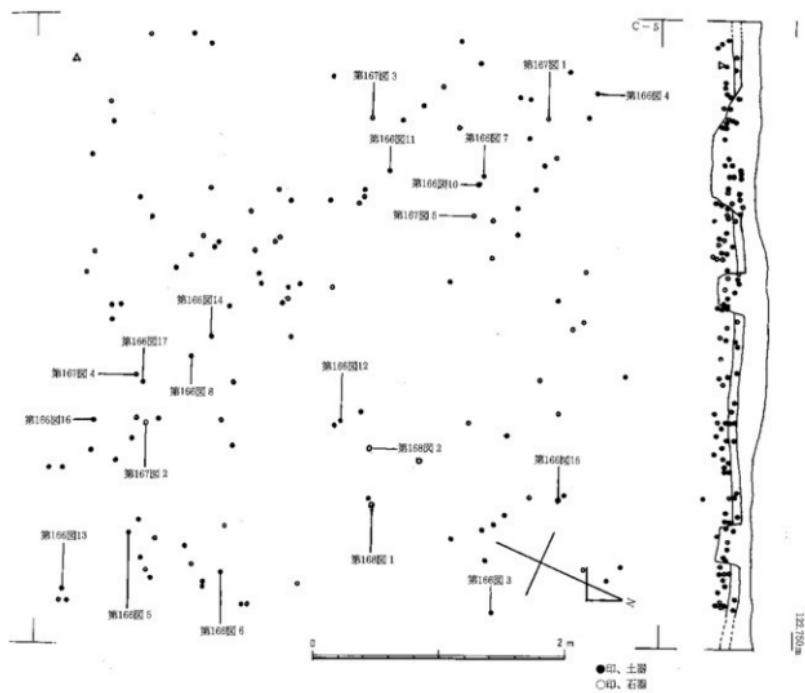
大型の横長剥片素材で、分厚く全体形は扇形を呈する。片面の一部に自然面をとどめ、一方の面には第一次剥離面をそのまま残す。刃部は長軸一辺に片面より押圧剥離を小さく加え外溝する鋭利な刃先を作出する。

打製石斧（第164図6）

細長い扁平礫素材で、片側面と刃部両面に打ち欠きを粗く加えただけで打製石斧とした粗製品である。

石鐵（第164図7・8）

2点は二等辺三角形を呈し、基部の抉りは弧状に浅く、共に押圧剥離による加工は粗く粗製である。（7）は先端と両脚端を欠失し、（8）は完形で先端部は丸みをなす。



第165図 C-5区出土遺物平面、垂直分布実測図

(19) C-5区の出土遺物

本地区には配石遺構の検出はない。遺物は石器、土器共にほぼ同等に出上しているが、その量は少ない(第165図)。

土器（第166図）

第4 A類（第166図1）

1点の資料で深鉢の胸部片である。器壁は緩く膨らみ、外面には横走さす2条単位の沈線と、それに接して2条の沈線を緩く斜行させている。沈線間は細文RIが施され磨消細文手法となっている。

第4 B類 (第166図2~6)

深鉢と浅鉢がみられ、深鉢は胴部片、浅鉢は胴部片と口縁部片である。深鉢胴部片(2・3)は、器壁は緩く膨らみ、外面には(2)が繩文RL、(3)はLRが施され、その面に2条の平行横直線とそれに接し斜行沈線が描かれる。本資料は逆三角形文を描き飾っていた胴部文様帶の一断片である。(4)は浅鉢の胴部片で、器壁は薄く球状に膨張させている。外面には2条単位の沈線を上下2段に横走させ、その中間を縦位の2条沈線で繋ぎ、さらに「L」字状の沈線で開み文様構成して

いる。沈線間の縄文はRLで、磨消縄文手法となっている。(5)は浅鉢の口縁部片で、端部は丸く作られ、波状の傾斜は緩い。外面には横走さす沈線が途中で直角に折れて2条を垂下させ、沈線間に縄文LRが施されている。(6)は平縁を呈し、内曲さす口縁外側は肥厚し、端部は尖る。外面には小粒の縄文LRが施され、その面に2条の平行横直線を間隔を開けて描き、2条沈線間の中央を大きく波状に描いて文様構成している。

第4 C類（第166図7・8・13）

深鉢の口縁部と胴部片である。口縁(7・8)は平縁で、長い頸部は外反し、「く」字状に内折さす口縁はやや肉厚く、端部は(7)が平坦面を持ち、(8)は丸みをなす。外面には縄文LRが施され、その面に太い平行沈線2条を描き、(8)の沈線末端には継位の短直線が小さく付されている。(13)は胴部片で、内面の頸・胴部との境目に稜を持つ。これの胴部は丸く膨らみ、外面には小粒の縄文LRが施され、その面に平行横直線4条が巡り、沈線間に刺突文を対向さす手法をみる。これの沈線は太く、胴部文様帶の中に斜行刻目文を全く見ぬ。

第4 D類（第166図9～12）

深鉢と浅鉢が混在する。深鉢(9)は緩い波状口縁を呈し、頸部は弓状に外反し、口縁は「く」字状に内折させ端部は丸くおさまる。外面には縄文LRが施され、その面に3条単位の沈線が描かれている。(10)は無文で平口縁を呈し、外反する頸部と「く」字状に内折させ口縁を持ち、端部は尖り気味となる。(11)は浅鉢の口縁部片で、器壁は緩く内湾し、端部は丸く作られる。外面には2条の平行沈線を描き、その沈線間に小さな円形刺突文が連続施文されている。(12)は深鉢の胴部片で、外面には3条の平行横直線と1条を波状に描き文様構成している。

第5 C類（第166図14）

深鉢の胴部片で、胴部は丸く膨らみ外反する頸部へと移行するが、口縁を欠失し、この部分の器形は不明。

底部（第166図15～17）

3点は總て、外底が弧状に深く上がる上げ底をなす。(16)は推定底径8.5cmのやや大型である。

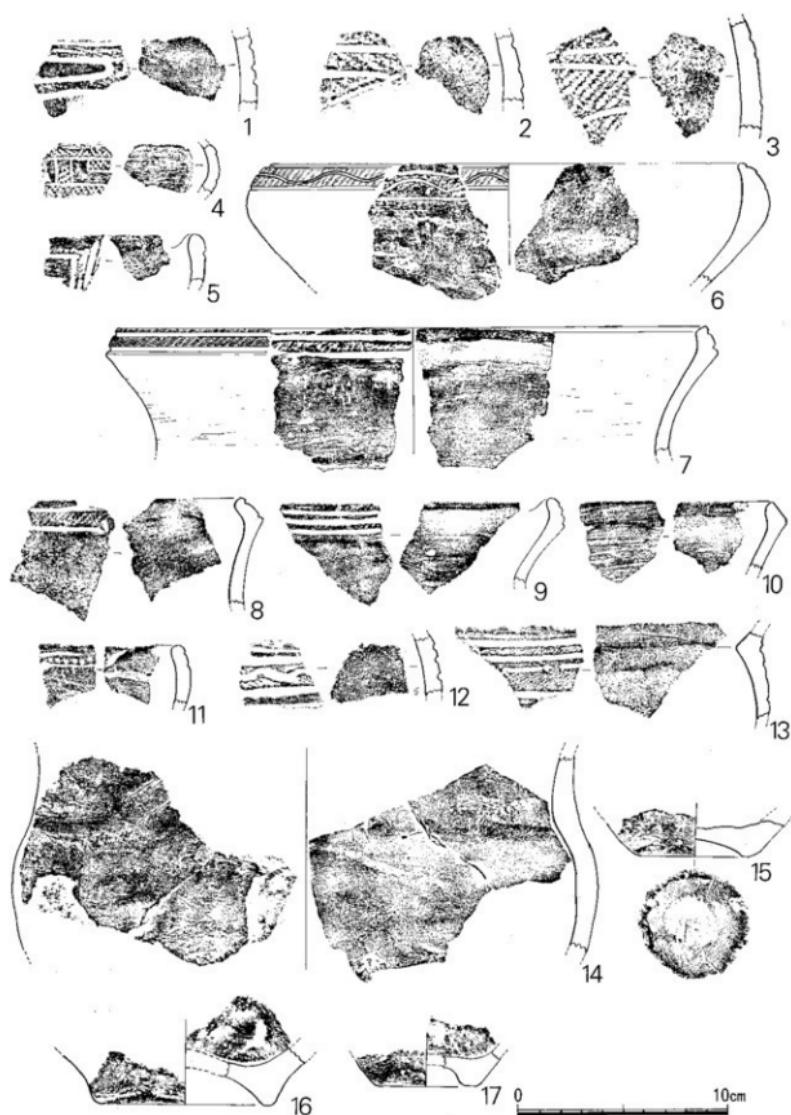
石器（第167図～第168図）

石材核（第167図1・2）

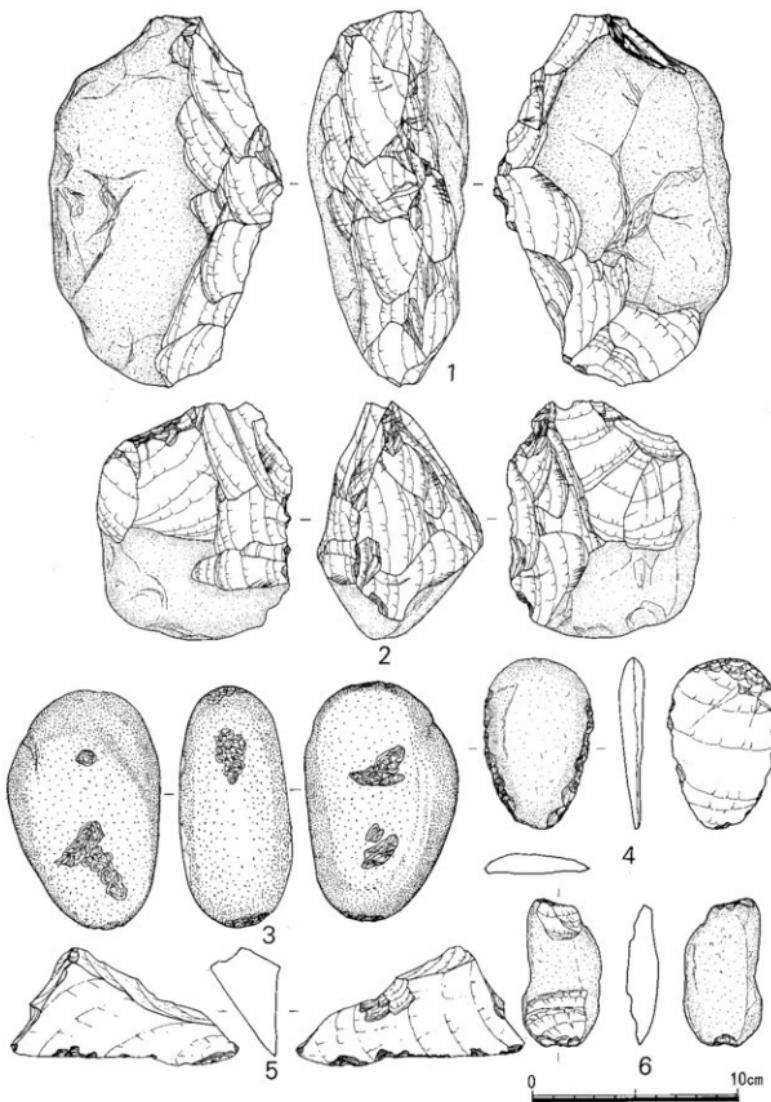
(1)は大型の楕円形礫素材で、長軸一辺に打面を持ち、表、裏と打面を交互に転移しながら剥片剥離がなされている。その剥片剥離痕を両面にとどめているが、身の中央から片方に向っての全面に自然面を幅広く残す。(2)は四角形に近い礫を素材とし、長軸一辺と短軸の2辺に打面を持ち、これも交互剥離技法によって激しく横長剥片剥離がなされている。剥離痕は深く及び、身の一部両面に自然面を幅狭くとどめている。

叩石（第167図3）

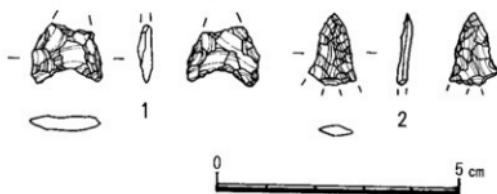
楕円形をなす砂岩礫素材で、長軸両端と側面の一部、それに平坦面を持つ上面にアバタ状となる使用痕をとどめ、一部には深く凹む使用痕を残す。



第166図 大宮・宮崎遺跡C-5区出土土器



第167図 大宮・宮崎遺跡C-5区出土石器



第168図 大宮・宮崎遺跡C-5区出土石器

スクレイバー（第167図4・5）

2点共に縦長剥片素材で、(5)は分厚く、素材の片側面に細かく押圧剥離を加え鋭利な刃部を作出している。(4)は扁平で楕円形を呈し、剥片の両側縁に押圧剥離を加え刃部を形成する。タイプとしては特異である。この片面は自然面を、一方の面には第一次剥離面をそのままとどめている。

石錘（167図6）

長楕円形を呈する扁平自然礫素材で、長軸の両端に打ち欠きを粗く加え石錘としたものである。

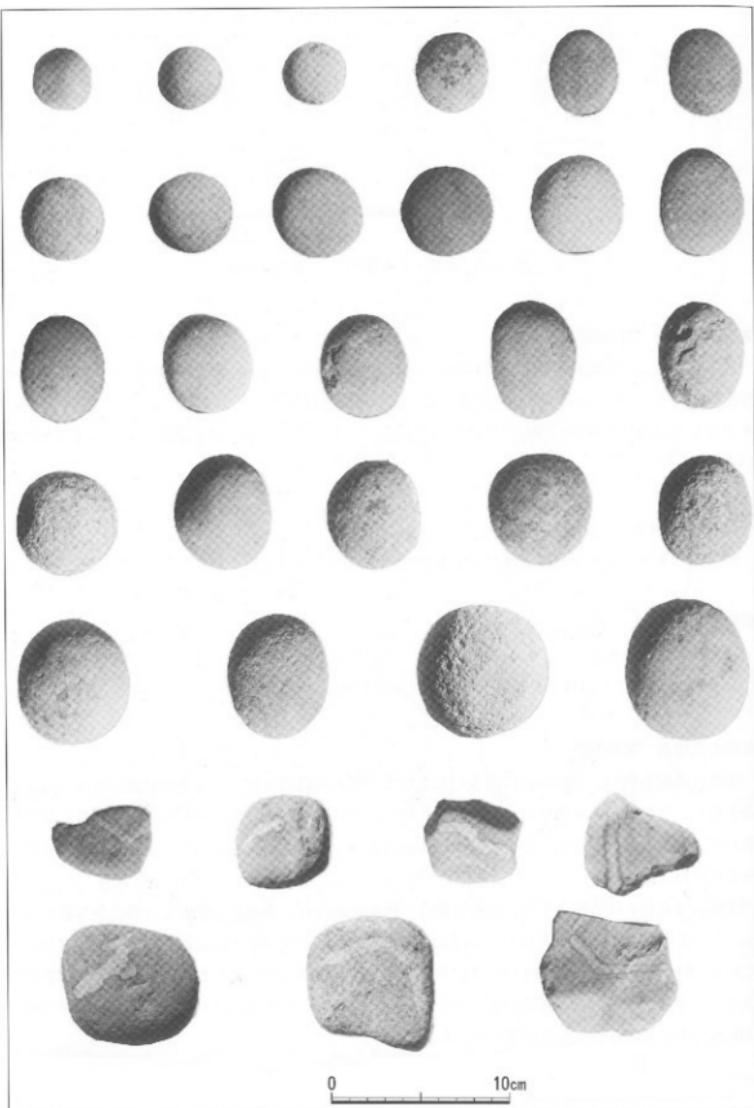
石鎚（第168図1・2）

共に二等辺三角形を呈し、(1)は先端を、(2)は基部を欠損している。押圧剥離による加工は(2)は入念で(1)は粗く基部の抉入も弧状を呈し浅い。

丸石と文様石（第169図）

両者は各配石内や、その周辺に出土したもので、丸石は球状を呈し、大きさは直徑2cm～6cm前後を測り、これより大きなものはない。出土数40点余りみられ、表面が研かれたものはなく総て自然石で、石質は1点の花崗岩を見る他は総て砂岩である。特に第10号配石内に丸石の出土が顕著にみられ注目された。

文様石は丸石と同等数出土し、石質は砂岩と頁岩がみられ、表面は水磨を受け滑らかな肌を呈する。その表面にはミズ状文や小さな円文が黄白色、青白色を呈する色調でくっきりと表れたものである。特に水に濡れると色鮮やかで、石面に浮き出た文様は神秘的である。形は円形をなすものではなく、どれも不定形で、直徑20cm～30cm大の扁平礫の中にも文様石はみられ、このタイプのものは配石の中にも組み込まれた状態でみられる。



第169図 丸石と文様石

大宮・宮崎遺跡C-5区出土土器観察表（第67表）

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外 面	内 面		
第166図1	表採	深鉢胴部	26	淡黄色 磨消繩文RL	淡黄色 箒研磨	細砂粒	良好
2	表採	深鉢胴部	31	暗茶褐色 繩文RL	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
3	6	深鉢胴部	23	赤褐色 繩文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
4	81	浅鉢胴部	21	灰白茶色 磨消繩文RL	灰白茶色 箒研磨	細砂粒	良好
5	102	浅鉢口縁部	?	黄褐色 磨消繩文LR	黄褐色 箒研磨	細金雲母粒	良好
6	112	浅鉢口縁部	22 25	灰茶褐色、繩文LR, 撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	長大石粒	砂良好
7	46	深鉢口縁部	28	赤褐色、繩文LR, 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	長細石砂	良好
8	59	深鉢口縁部	25	黒褐色、繩文LR, 撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	細砂石粒	良好
9	表採	深鉢口縁部	25	暗赤褐色、繩文LR, 撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
10	15	深鉢口縁部	30	黒褐色 撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
11	18	浅鉢口縁部	13	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂粒	良好
12	5	深鉢胴部	21	黒褐色 繩文RL	灰白色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	110	深鉢胴部	29	赤褐色 繩文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
14	42	深鉢胴部	28	黄茶色、スッ付 着、撫で滑らか	淡黄茶色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
15	123	底 部	6.0	灰白茶色 部々に剥離	内白茶色 撫で滑らか	細砂粒	良好
16	12	底 部	9.0	赤褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
17	14	底 部	5.0	赤褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好

大富・宮崎遺跡 C-5 区出土石器観察表（第68表）

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第167図1	29	石材核	7.8	18.2	11.7	1710.36	頁岩	両面に自然面残す。剥離面鋭利。
	2	石材核	8.0	11.5	9.5	974.99	頁岩	自然面を両面に残す。剥離面鋭利。
	3	叩石	11.8	7.6	5.3	570	砂岩	梢円形難素材、両面、両端部に使用痕。
	4	スクレイバー	8.3	5.3	1.2	54.48	頁岩	片面全面に自然面残す。両側面に刃部。
	5	スクレイバー	10.9	5.8	3.3	120	頁岩	縦長剥片素材、片面側面に刃部形成。
	6	表採石錐	7.2	3.9	4.6	4.05	砂岩	完形
第168図1	25	石鎌	1.2	1.4	0.3	0.46	サヌカイト	先端部欠損
	2	石鎌	1.5	1.0	0.3	0.22	姫島産 黒曜石	両脚欠損

第6章 考察

中世・近世

本遺跡の第1層下半部に中世・近世陶磁器の出土と遺構が検出されたが、輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）については、その特徴から第38図（1）青磁碗が15世紀に位置付けられる他は、総て16世紀前半から後半にかけてのものとみなされる。また、国産陶磁器で擂鉢を主体とする備前焼についても大部分が16世紀中頃ないしは、その後半のもので占められている。ただし、擂鉢の第41図（12）、第42図（11）の2点については共に17世紀とみなされ、伊万里系、肥前系、唐津系、瀬戸系などの皿、碗、蕎麦猪口などと鉛玉、錢貨などについても17世紀～18世紀頃としておさまるものである。

溝状遺構については、内部より青磁片や赤絵碗胴部片などの出土が明らかなことから16世紀のもとみて大過ない。集石遺構は出土遺物から近世のものとみなされ、柱穴群は中世・近世の判別が困難で、これについては両時期にまたがる掘立柱建物遺構と推断するにとどまる。いずれにしても、これらの遺物と遺構によって、本地区における中世・近世の生活の存在とその内容の一端が確かめられたことは一つの収穫であったといわなくてはなるまい。これを機会に本地域の内陸山地におけるこの時期の生活実相がより明らかとされることを願うものである。

縄文時代・土器

第2・3・4層に縄文遺物を見るが、第2層は水田の床土（マンガン沈澱層）で層厚は極めて薄く、主要遺物包含層となるのは第3層である。第2・3層にみられる遺物は少量の晚期遺物をみると他は縄文後期に限られ、第4層は微量の前期に属する遺物を見る。

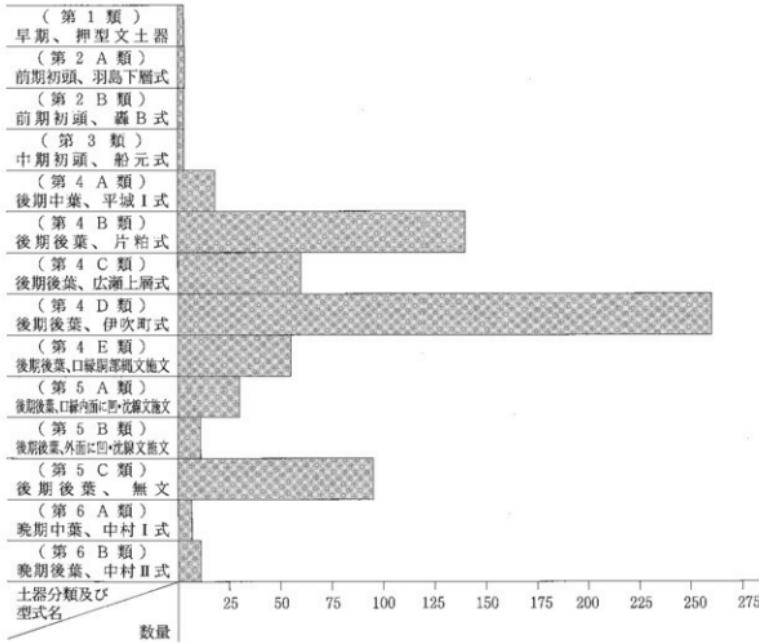
発掘調査による遺物は既述の前期を上限とするがB-1区とされる表採遺物の中には早期のものが含まれ、またA-1区からは中期の遺物もみられた。したがって本遺跡における居住生活の上限は、遺物に見る限り早期にある。早期に所属する遺物は押型文土器片1点で、器形や文様の特徴から、これは早期でも後半の南九州地方に広く分布する手向山式に該当し、本県の城ノ台式（佐川町城ノ台洞穴遺跡出土土器標式⁽¹⁾）と呼称されているものに一致する。本タイプ土器の出土は稀で、本県では城ノ台と本遺跡の2例を数えるのみである。

前期土器は第4層に出土のものと、A-2区で表採された2点の資料を見る。これらは2点が瀬戸内の羽島下層式で、他の1点は九州地方の轟B式である。共に前期初頭に編年されるものであり、この時期、九州、瀬戸内両地方からの文化波及のあったことを証し、当時の文化様相を知る資料として本土器は極めて貴重である。

中期は、その初頭に属する船元式そのものであり、本地域のこの時期は瀬戸内文化圏内にあったことを示している。この船元式土器にみる本地域における分布は、海岸部に密度が高く、特に宿毛貝塚⁽²⁾や間崎遺跡⁽³⁾は著名で、後者は中期の単純遺跡として知られている所である。また中村市国見遺跡⁽⁴⁾からも良好な資料の出土をみる。本遺跡におけるこれらの早～中期土器は各期とも極少である。A-0区では第4層に前期土器の出土をみたが、中期は本層の最上部に、早期は第4層の最

深部に包含されていたものとみなされるものの、本遺跡では配石造構を第3層下部に乗せていることと、その保存を考慮し、その下部への掘り下げを行っていない。それを実施し完掘すればこの時期における資料の増加も十分に期待できよう。ただ、その場合、B-0区の第4層を掘り下げた感触から、大量遺物の出土はまず望めないであろう。

以上の本遺跡における早～中期までは、配石が構築される以前のものであることは詳述するまでもないが、たぶん、この地は早～中期の縄文人による狩猟の際の一時的なキャンプ地として利用されていた場所とみて大過なかろう。第2、第3層には前述のとおり縄文晚期から後期の遺物を出土し、第3層下部には配石造構を見る。後期でも、本遺跡には初頭から前葉にかけての遺物（土器）が全く見られず空白で、少量の遺物をみる中葉から始まる。しかし主体をなすのは（第170図）で明らかなるおり後期でも後半にある。



第170図 大宮・宮崎遺跡出土縄文土器（第1類～第6類）比率図

後期中葉は、愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚出土土器を標式とする平城⁽⁵⁾I式（第4A類）がみられる。図示した681点（底部55点除く）中、本式土器は2.4%が明らかで、出土量としては少ない。これらの平城I式とした中でも第50図（3）は、器形、文様の特徴から本式土器の中でも最も後出



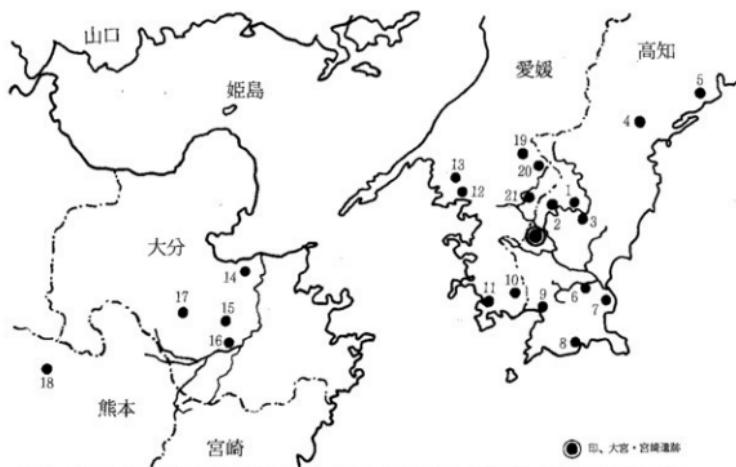
第171図 四国西南部の平城I式土器出土遺跡分布図

するタイプで、平城貝塚の平城III群⁽⁵⁾bに該当する。これと同タイプの土器は西土佐村の曾我の西遺跡⁽⁷⁾に出土例が知られ、海岸部の尻貝遺跡⁽⁸⁾にはまとまった出土量が知られている。また、尻貝遺跡には典型的な平城I式もみられ、四万十川中流地帯の大正町江師遺跡⁽⁹⁾や川口遺跡⁽¹⁰⁾、それと下流地帯の中村市船戸遺跡⁽¹¹⁾からも少量ではあるが良好な資料の出土が知られ、近年その資料と遺跡は増加しつつある（第171図）。なお、平城貝塚には平城I式土器の他、平城II式⁽¹²⁾が大量に出土している。この平城II式は平城I式に後出す

るとする説と、先行するものだとする2説ある土器群であるが、本遺跡からはその平城II式土器の出土は皆無で、後期中葉の中でも平城II式期は欠落し空白である。結局、この時期における本遺跡との関係は全くなかったといわざるを得ず、その背景についてが今後の研究課題として残された。

後期後葉片柏式土器（第4B類）は、本地方独自に生成された極めてローカルカラーの強い土器群である⁽¹³⁾。この土器の出土は、まずは量の量出上し、全体割合約20%が明らかで、この時期をもって配石遺構——縄文人とのかかわりの強まりをみせてくる。

片柏式は深鉢と浅鉢をみると、その外面に描かれる文様は曲線と直線を組み合わせた幾何学的文様で構成する。地文とする縄文は、燃り方向が先行型式土器にみられたRLがLRとなり逆転するのが強い特徴である。この縄文の燃り方向による逆転は東方（畿内）からの強烈な文化波及によるものとみなされている。したがって、この時期には、高知県でも中央部以東にかけての地域に出土するものには片柏式に似てはいるが、それには含めることのできない畿内地方の北白川上層式系土器を出土する。このように片柏式は、本地方独自のものといえども厳密には、畿内地方から波及をみた土器文化の影響下に成立したものということが言えるのである。本遺跡出土の片柏式の中でも特に浅鉢には磨消縄文手法となる精製品が伴い、また大型で口縁外面を逆三角形文を連続転回させ、その文様帶の中に円形刺突文を配して飾る第81図（1）や、緩い波状口縁を有する第122図（8）は、従来の本式土器の中では見られなかったものであり注目される。



第172図 四国西南部を中心とした片柏式土器出土遺跡分布図

片柏式の分布は土佐清水市片柏遺跡を中心に、宿毛貝塚や平城貝塚⁽¹⁴⁾など海岸部と、四万十川流域の江節遺跡をはじめ藤崎、北ノ川、川口や船戸⁽¹⁵⁾、初崎⁽¹⁶⁾など中流域から下流地帯にかけてみられる。また、県境を越えた愛媛県北宇和郡に流れる四万十川の支流、広見川の河川端に立地し四国初の配石遺構を出土した岩谷遺跡⁽¹⁷⁾からもみられ、さらに高知県東部の葉山村新土居遺跡⁽¹⁸⁾からも良好な資料の出土が知られ、東部の西分増井遺跡⁽¹⁹⁾からも出土しているが、この遺跡からは片柏式に近縦系の上器が共伴している。一方、九州地方にも本式土器の出土が知られ、大野川流域から内陸山地にかけて、また、熊本県の天岩戸岩陰遺跡⁽²⁰⁾にまで出土が知られるに至っている（第172図）。

以上のように片柏式土器の広がりは県西南部を中心とし、東方へと波及し、さらに豊後水道を越えた対岸、東九州地方へと伝播しているのである。その背景には、九州を含めた広範な縄文人の交流のあったことはもちろんのこと、各地域との親近関係を密に保っていたことに他ならない。

後期後葉・広瀬上層式（第4C類）は片柏式を祖型とし生成をみた土器群で、型式編年的には片柏式→広瀬上層式となる。出土割合は先行型式の片柏式よりやや弱く8.6%を占める。本式土器は片柏式土器を踏襲し、深鉢口縁部は片柏式にみる「く」字状に内折さず形状を呈し、その端部は丸みをなし特徴とする。胴部は上半部に最大径を持ち、文様を口縁外面と胴上半部に横帯状に形成する。口縁文様には、片柏式で特徴とする波状文は本式では完全に消失し、外面文様は平行横直線化



第173図 四国西南部の広瀬上層式土器出土遺跡分布図

する。ただし、口縁内面には片粕式に顕著な押し引き状列点文を踏襲し、その手法の施されるものを見る。また、片粕式の深鉢口縁波頂部にみられた粘土紐隆起文は、本式では極度に衰退しながらも痕跡程度となって残存する。胴部にみる横帶状文様帶は、先行型式に比べやや幅狭くなるが、文様構成は逆三角形文を連続転回させ、片粕式の要素を色濃く残す。ただ、その場合、逆三角形文は圧縮され傾斜を弱めたものとなり、沈線の末端に小さく綱位の列点文を付す手法が多用された本式特有の文様構成をとる。中には胴部文様が平行横直線化したものも本式土器には稀にみる。その場合の沈線は筋の太いものとなり、決して文様帶の中には後続の伊吹町式で多用される斜行連続刻目文をみない。この斜行連続刻目文を見ると見ないとで、伊吹町式かを決める目安の一つにもなっている。

本地域における広瀬上層式を出土する遺跡分布は、片粕式期に比べやや後退の様相をみせ、その遺跡数もそう多くはない。本式土器の標式遺跡は四万十川中流地帯に所在する十和村広瀬遺跡⁽²²⁾で、その遺跡の後期に属する遺物包含層の上層に出土した土器群を一括設定したものである。その後、本式土器の出土遺跡も相次ぎ発見され、現在では少ないといえ7個所を数える(第173図)。主に西南部に集中するが、西分増井⁽²³⁾や田村⁽²⁴⁾両遺跡からも知られ、高知県中央部からその以東にかけてまでを分布域としている。中でも突出し良好な遺物を出土するのは平城貝塚である。平城貝塚出土の本式土器には完形に復元可能な資料(深鉢)10数点を数え、本式土器を出土する所としては、



第174図 四国西南部の伊吹町式土器出土遺跡分布図

本地域で代表的遺跡といつて過言でない。本式土器を母体とし成立をみたのが次に述べる伊吹町式土器である。

伊吹町式（第4D類）土器は愛媛県宇和島市伊吹町遺跡出土の後期後葉に属する土器を一括型式設定されたもので、九州地方の西平式土器に対比される⁽³⁵⁾。この伊吹町式土器は調査区の全域にまばく出土分布し、本遺跡主体の土器群である。全体割合としては39%を占め、その土器内容は伊吹町式として典型的様相を呈し、本式土器を出土する遺跡として、本遺跡は高知県下で代表する所となった。器種

は深鉢と浅鉢をみると、深鉢には平口縁と波状口縁があり、波状口縁は波頂部に「V」・「U」字状の切れ込みを施し特徴とする。平口縁、波状口縁共に口縁は「く」字状に内折さずが、先行型式に比べ小さく萎縮退化する。口縁、胴上部にみる文様帶は縦で平行横直線化し、広瀬上層位にみられた口縁内面に施される押し引き状刺突列点文や胴部に描かれた逆三角形文はこの時期には全く姿を消す。浅鉢も深鉢同様、波状・平口縁共にみられ、口縁外間にみる文様は平行横直線文を主体とし、稀に傾斜の緩い逆三角形文を描くものを見る。これらの文様帶の中には「C」字状や、それを対向させた「CO」文、逆対向させて「OC」字状文などをみるが、特に多用されるのは沈線間や、沈線の溝の中に穀粒状の小さな列点刺突文や斜行刻目文を横位に連続施文することである。この連続斜行刻目文は、中でも深鉢に顯著で本式土器の強い特徴となっている。また、本式には胴部の平行横直線文の中に1条を波状に描き飾る例や、小さな刺突文を沈線の末端に施し左右対向するもの、また深鉢の波状口縁を呈する波頂部直下に1条の短直線を横位に描き、その沈線間に接し連続刻目文・列点文を施す手法のものを見る。この手法は伊吹町式独自といつても過言でなく、九州の西平式には見られぬ特徴である。

これらの伊吹町式土器の出土遺跡分布は、西南部に集中し、本遺跡を合わせ現在11個所が明らかである（第174図）。それらは海岸部と四万十川流域の2地域に分布が分かれ、特に岩谷遺跡⁽³⁶⁾は良好な資料を多量に出土し愛媛県側での本式出土遺跡として伊吹町遺跡と並び代表となっている。ま

た、四万十川下流地帯に所在する船戸遺跡⁽³⁷⁾、初崎遺跡⁽³⁸⁾も良好な遺跡で、前者には深鉢波状口縁の波頂部に広瀬上層式にみられた粘土紐貼付文の衰微した手法が看取され、伊吹町式の中でも古式に位置付けされ得る資料の出土が知られ注目される。その船戸遺跡には古式とみなされる土器資料の出土が豊富で、それら資料の吟味によっては本地方における伊吹町式も新・古の2型式に細分が可能で、その整理が急がれる。四万十川河口近くに所在する初崎遺跡の資料は岩谷同様、斜行連続刻目文を多用する典型的な伊吹町式で、その資料は細片ではあるが数多く、特にサヌカイト製石鎌、その剥片を多出し特徴とする。既述のように本遺跡で主体をなすのは伊吹町式であることが明確となったが、配石造構とのかかわりという観点からは、この時期をもってピークに達したといつても間違いない。

深鉢の口縁、胴上半部の外面に横帶状に纏文を施すタイプを第4E類として一括したが、本類には第4B～D類とした各類土器（片鉢式・広瀬上層式・伊吹町式）にセットとして組み込まれたものが混在し含まれており、割合として本類は8.2%を占める。まず第4B類片鉢式に含まれられるものとして第72図(16)、第73図(1)、第95図(1)、第148図(4)などが挙げられる。第85図(12)の口縁内面に文様をもつ資料や同図(16)、第116図(5)などの羽状に施されたタイプも平城貝塚出土の片鉢式共伴資料からみる限り、その可能性を強く感ずるものである。他の大部分は第4D類伊吹町式に共伴するものとみてよかろう。ただし、その一部には第4C類広瀬上層式に伴うものが含まれていると見なくてはなるまいが、今回は、どれが第4C類に伴うかは明確とし得なかった。なお、これについて今は後の資料の増加を待って検討するにとどめた。

第5A・B類としたものは前者が口縁内面に、後者は外面にそれぞれ凹線・沈線文が施されたもので、厳密には両者は時期差なく同時期、同一型式土器である。器形や文様の特徴から、本類は後期後葉の第4D類伊吹町式土器の次に編年位置付けされ、第4D類からの転化発展型土器群とみられるもので、九州の三万田式に酷似し、瀬戸内の福田KⅢ式や畿内の元住吉山式・宮滝式に対比されるものである。

器形は深鉢と浅鉢が明らかで、特徴となる凹線・沈線文は内面に施されるもの4.2%、外面にみるものはやや少なく0.7%となり、合わせると全体の4.9%を占める。特にA-O区に良好な資料の出土がみられるが、深鉢で波状口縁を呈するタイプ（第46図4・5）は、本地方では出土例に恵まれていなかっただけにその価値は高く意義深い資料といえる。いずれにしても、本地方におけるこのタイプ土器の出土は少なく、本遺跡を含め現在7個所を数える（第175図）。どの遺跡からの資料も貧弱で、この時期における全体様相についてが今一つ明らかでない。幸い今回の調査ではまとまった資料の出土に恵まれ、その様相も徐々にではあるが見えてきつつある。もちろん、本タイプ土器の出土量では今回の資料が最良、最大で、現時点での本地方におけるこの時期の土器を出土する所としては本遺跡は代表的遺跡となつた。

出土資料は本地域で最大量を誇るとはいへ、まだこの内容では本時期における実態解明には欠け、今後の資料の増加を待つ他かないものの、これらの資料にみられる特徴は既述のとおり九州の三万田式と呼称されるものに一致する。特に大分県下最大の河川である大野川の支流、野津川流域に所在する内河野遺跡⁽³⁹⁾の第1号～第3号住居跡内に出土の纏文後期土器は、全く同一といってよいほ



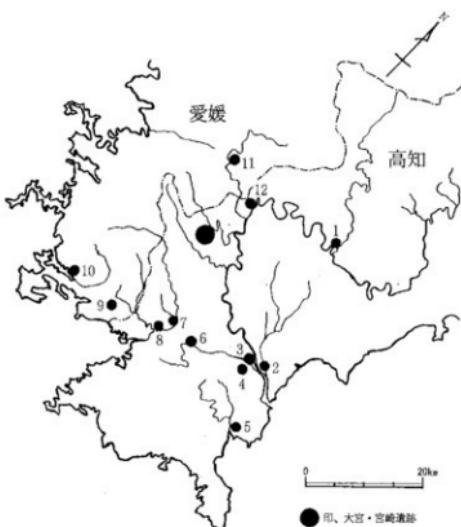
第175図 四国西南部の大宮・宮崎K式土器出土遺跡分布図

尖り気みとなるもの、丸みをなすものなどがみられた。胴部は上半部に最大径をもち、緩く膨らむものと丸く球状に膨張さすものもみられ、器面は横撫でによって滑らかな肌を呈する仕上がりとなっている。これらの特徴を有する本類は、厳密にはどの類土器にセットとなるかは正確には明らかとし得ない。しかし、その器形にみられる特徴からはある程度の推測は可能である。また、本遺跡で主体となる第4D類伊吹町式、第4B類片柏式、第4C類広瀬上層式各式土器には、この無文土器の共伴がほとんど知られてなく、極めて少ない様相をみせている。このことから推して、この無文土器の大多数は第5A・B類土器に共伴する可能性が高いのである。内河野遺跡第1号～第3号住居跡出土の後期葉三万田式土器の中には、無文土器が占める割合が極めて高く、また、その口縁、胴部器形や口縁端部の特徴などは、本遺跡の第5C類無文土器に酷似し、それを傍証している。本遺跡の無文土器の一部は第4A～D類土器に伴うものが含まれていることも考慮しなければならないけれども、内河野遺跡の例からみて、その大多数は第5A・B類土器にセット関係にあったとみて大過ないであろう。なお、これらの第5C類無文土器の大部分を第5A・B類に含めると、その全体割合は18%前後を占めることとなり、第4B類片柏式の出土量に匹敵する。

第6類は深鉢の口縁外側に突帯を有する縄文晩期の土器で、それらはA・B類の2つに分けられた。A類は無刻目突帯を特徴とし、B類は刻目突帯を有するタイプで、共に中村市中村貝塚出土土器を標準とし、A類は下層に出土する土器群を一括型式設定された晩期中葉の中村I式、B類は上

ど共通する要素を有し注目されるのである。今後、この地方との交流と、その土器文化の関係についてが一つの研究課題といえそうである。本遺跡出土の第5A・B類土器が九州の三万田式に酷似することについては既述のとおりであるが、今回、一応まとまった資料の出土に恵まれたこともある。これらを一括、本地方の三万田式に対応する土器群として大宮・宮崎K式土器と新たに型式設定したい。今後、これと同一タイプ土器の出土をみた場合は、その型式名で整理統一してゆきたいと考えるのである。

第5C類とした無文土器は、全体の14%を占めますますの量を出土している。深鉢の口縁器形は直線的に延びる器壁が外傾、直立気味、また外反するものなどを主体とし、その端部は水平にカットされて平坦面を作出するもの、



(遺跡名) 1. 江部、2. 中村鉢塚、3. 入田、4. 船戸、5. 下ノ加江、6. 有岡ツグロ橋下
7. 熊上、8. 二ノ宮、9. 広見、10. 平城貝塚、11. 岩谷、12. 江川大野平

第176図 四国西南部の中村Ⅰ・Ⅱ式土器出土遺跡分布図

半部に1条と計2条突帯をみるのを原則とし、器面には横走する条痕を残す。以上の第6類土器の出土は、A類に比べB類が若干勝り両者合わせてもその全体割合は1.0%と極少である。中村Ⅰ・Ⅱ式を出土する遺跡を本地方でみると、現在13個所を数える(第176図)。この中でも遺物の大量出土をみるのは標準遺跡の中村貝塚で、ここからは中村Ⅰ式を主体とし、Ⅱ式は少ない。次いで多くの遺物を見るのは有岡ツグロ橋下遺跡⁽³⁰⁾で、この遺跡からは中村Ⅱ式が多くみられる。共に遺跡は四万十川下流地帯の低地に立地する。この時期には稻作農耕が既に行われていたと考えられており、本地域における良好な遺跡は、既述のとおり四万十川や、下ノ加江川、松田川など各河川にみる平野のよく発達する河口近くに分布する。ただ、この時期の遺跡として内陸山地は皆無かというと、そうでもなく江部、広見、岩谷諸遺跡に明らかなとおり存在するのである。ただ、その場合、遺物が少ないとから、この地域にみる集落は小規模であったと推察される。近年、地元で新発見された江川大野平(西土佐村)遺跡⁽³¹⁾からも、中村Ⅱ式やそれに伴う良好な扁平打製石斧の出土が知られている。遺跡は四万十川本流の河岸段丘上に立地する内陸山地型の遺跡で、ここからの中村Ⅱ式土器片も他のタイプ遺跡同様少量である。大宮・宮崎遺跡における出土縄文土器は、この第6B類晩期後葉中村Ⅱ式土器をもって終える。

以上、縄文土器についてを述べたが、上限を示すものとして早期後半の城ノ台式を挙げることができ、次いで前期の羽島下層式・轟B式、その後に中期の船元式、そして本遺跡で中心をなす

層に出土する晩期後葉の中村Ⅱ式に該当する⁽³²⁾。

中村Ⅰ式の口縁部内面には、口縁に平行する1~2条の沈線を見るのを特徴とするが、本遺跡には、そのタイプ土器の出土はないが今後の調査如何によつてはそのタイプ土器の出土も見ることであろう。この中村Ⅰ式は、東九州地方の田村上層式(上菅生B式⁽³³⁾)と同一といつてよいものであるが、ただ中村Ⅰ式には既述のとおり口縁内面に沈線文の描かれるものがみられ、この点、東九州地方のものとは明確に異なり本地方で生成された独自性をみせる。中村Ⅱ式は北部九州の夜臼式単純層(夜臼Ⅱa)に相当し、口縁外面上に1条の突帯をみる他、胴上

後期の平城I式、片柏式、広瀬上層式、伊吹町式、大宮・宮崎K式、終焉を示す晩期の中村I式とII式の5時期11型式土器の出土が確かめられた。中でも草創期、早期前半、前期後半、中期後半、それに後期では、同じ配石遺構を伴う岩谷遺跡では後期初頭の中津式、前葉の宿毛式・福田KII式を多く出土しているものの本遺跡には、それらの上器は全くみられず、さらに晩期は前葉が抜けるなど各期にみる欠落が看取される。この欠落にみる各時期には、本遺跡との関係が絶たれていたことを示すものであろう。

中心をなす後期は、その後葉伊吹町式期に全盛期のあったことが明確となった。後期はその中葉の平城I式から後葉片柏式→広瀬上層式→伊吹町式→大宮・宮崎K式と断続なく続いている。これらの後期は東西からの文化波及を受容しながらも西南四国独自に発展成立をみた極めて独自性に富んだ土器文化相を呈し、いわば各土器群は祖型からの血脉を連綿と受け継ぎ生成をみた西南四国独自の土器ということがいえるのである。

縄文時代・石器

石器は石材核から石鎌、石斧など15器種が明らかで、総数233点を図示した。それらは縄文後期～晩期土器に伴出したもので、編年的には一部問題を残す資料を含むものの、その総てに近くが出土土器期のものと断定し得る。それらの石器の器種別割合を示したのが第177図で、第69表には石質割合を示した。中でも群を抜き出土量を誇るのは石材核で調査区の全域に散在分布し、全体割合の35%を占める。石質は1点のサヌカイトの他は総て良質の頁岩である。また、これらの大半が一部に河原石の自然面を残す円礫素材で、近くの河原、目黒川または四万十川本流に原石採取地を求めていたことを示す。

石材核は、ほとんどが交互剥離技法によって剥片剥取され、剥片剥離された側面はジグザグ状に鋭利な稜線をとどめ、一見、礫器（ショッピング・トゥール、ショッパー）を思わせるものとなっている。また、それらは剥片剥離があまり進行していない分厚なものが主体を占めているのも本遺跡の石材核にみる特徴の一つである。これと同タイプの石材核の出土は、四万十川下流地帯に所在する縄文後期前葉三里遺跡⁽³⁹⁾が挙げられる。石材核の他、剥離された剥片は横長、縦長共にみられるものの前者が圧倒的多数を占める。それらの剥片は数千点にものぼる膨大な量で、鋭利な縁辺を残す良好な剥片が多数含まれている。剥片を剥取するための叩石も7.7%がみられるが、それらは1点が花崗岩で他は総て砂石礫を素材とする。特に叩石の中で第90図(7)、第141図(6)にみられるように超小型の叩石が含まれているが、このタイプは、かつて本地方の叩石の中には見られなかつたもので新たなタイプとして注目される。もちろん、本タイプの叩石の出土は本遺跡が最初である。

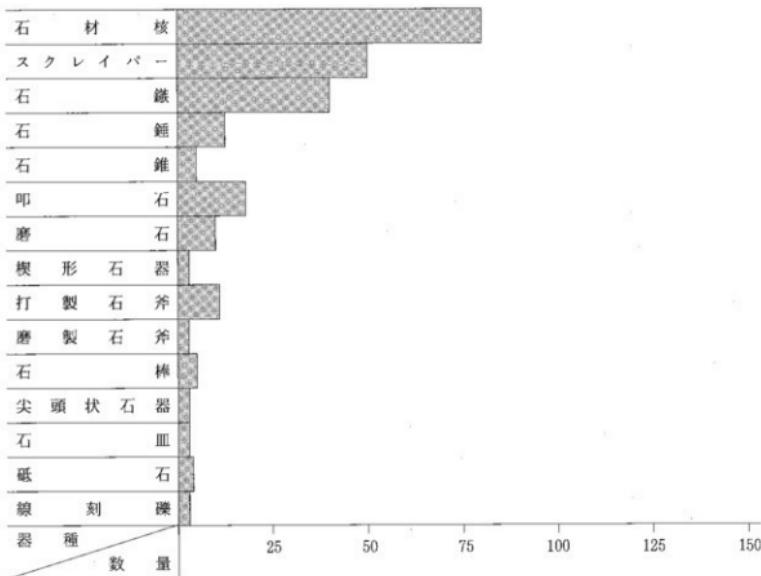
叩石、石材核、大量の石器剥片をみる本遺跡での、この在り方は、この場で石器製作が盛んに行われていたことを如実に示すものである。この地は後述するが、配石を伴う祭祀の場である。結局、石器製作は、この聖域とされる祭祀の場で行われていたことになり、この地が祭祀と石器製作場という二つの機能を有した遺跡ということになるのである。1点ではあるが、サヌカイト製の石材核の出土がある。色調、粒子などの表面観察から、これは香川県坂出市金山に産出する金山産サヌカイトとみて大過なく、その地方からの搬入品とみてよい。しかも、その石材核は板状をなし長方形

石質別にみた大宮・宮崎遺跡出土石器一覧表（第69表）

器種	石質	サヌカイト	頁岩	砂岩	花崗岩	姫島産黒曜石	結晶片岩	合計
石材核	1	81						82
スクレイパー	2	48						50
石 鐵	20	14				6		40
石 鏟			12					12
叩 石			17	1				18
磨 石			9					9
楔形石器		1						1
打製石斧		11						11
磨製石斧		1						1
石 棒							2	2
尖頭状石器		1						1
石 皿			1					1
砥 石			2					2
線刻礪			1					1
石 錐		2						2
合 計	23	159	42	1	6		2	233

に整形され、搬入当時の原形をほとんど崩していない。当時、交易によって運ばれた原石の大きさ、形状を知る上で本資料は極めて貴重であり、祭祀場からの出土という意味からも意義深い。もちろん、本タイプのサヌカイト製石材核の出土は、本県ではこの資料が初例である。

石材核の次に多くの資料をみるのがスクレイパーと石鎌である。前者は全体の21.4%、後者は17.1%を占め、正確には前者がやや勝る。そのスクレイパーは若干の縦長剥片をみるもの、ほとんどが横長剥片素材で、その一辺に粗く押圧剥離を加え刃部を作出する粗製品で、動物の解体や木工具としても使用されたらしい。中でも第78図(1)、第99図(4)にみるように長大なものは、これは種の穂摘み具としての石包丁として使用された可能性もあり、晩期の中村I・II式土器に伴うものとみてよかろう。石質は50点中2点がサヌカイト製で、他は總て頁岩で、サヌカイト製は小型で特徴的である。石鎌は、ほとんどが薄身で粗製品であり、基部は山形または弧状に抉られ、深く抉入されたものも少数みるものの総体的に抉りは浅い。また、中には基部に抉りのないタイプもみられ、大きさも一辺の長さ1cm~2cm前後の中・小型が大多数を占める。これらの特徴を有する石鎌は、厳密には基部に抉入を持つタイプは後期に、それのみられぬものは晩期に編入が可能である。石質は金山産サヌカイトの占める割合が意外と多く40点中20点を数え、次いで頁岩、姫島産黒曜石製も6点が含まれている。石材に見る限り、九州と瀬戸内の両地方からの搬入のあったことが認められ、両地方と親近関係のあったことを示す。



第177図 大宮・宮崎遺跡出土石器比率図

石錐、磨石が次いで見られるものの、その量は多くはない。前者は全体の5.1%、後者は3.8%で石質は総て砂岩である。石錐は扁平疊の長軸両端に打ち欠きを加えただけの一般に疊石錐と呼称されるタイプの粗製品で、全体的に小型であり、河川での網漁撈の錐として使用されたものである。本地方の縄文後期でも、この石錐を用いての網漁撈は後期初頭より始まり、中葉から後葉にかけて認められ、晩期には、その使用は途絶え石錐は全く見ない。したがって、本地方の後期に属するほとんどの遺跡より石錐の出土を見。一般に海岸部の遺跡に見られるものは、河川のものに比べ2～3倍の大きさを有する大型で占められている。本遺跡の石錐は後期に属し、平城I式～大宮・宮崎K式期のものとみて間違ひなかろう。

磨石は総て細粒質の砂岩円疊を素材とするが、どれも平坦面を有する上面の片側、または両面に使用痕を残し、中には長期間使い込まれ水平に磨耗したものや、表面全体を入念に研磨し光沢を有するものも含まれている。ただ、これとセットをなす石皿の出土が少なくバランスを欠くが、本遺跡が生活跡でなく祭祀の場であるということもあって、この場には意識的に磨石を好み、多く持ち込まれたものと理解されよう。この磨石は、縄文後期～晩期にかけて普遍的に見られるもので、特に中村貝塚⁽⁴¹⁾や有岡ツゲロ橋下遺跡⁽⁴²⁾にみるように晩期における出土例が顕著である。したがって磨石は、後期から晩期にかけてのものとみなくてはなるまい。石皿は前述したように少なく、わず

か1点の出土である。しかし、その資料は磨り面が使い込まれて弧状に深く凹む見事なものである。本資料も磨石同様の時期におさまるものである。ちなみに、石皿と磨石は既述のとおりセットとなるもので、一般に植物性食料の調理用具として使用されたと考えられているものであるが、時には魚肉などミンチ状とするのにも使用されたと思われる。

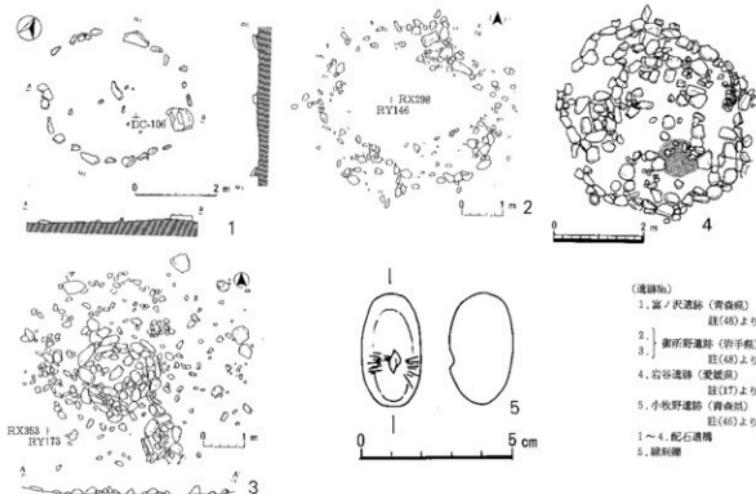
石斧としては磨製となるものが1点、打製は比較的多く全体の4.72%を占める。これらは共に後期～晩期までの時期に一般的に見られるものである。磨製石斧は樹木の伐採や木材加工などその用途は多用である。打製石斧は土掘り具（鍬）としての用途が考えられているものであり、特に稻作農耕が開始された晩期に顕著であることを考慮し、その大半は中村I・II式に伴うものと見ると妥当としよう。ただし第156図（9・10）は、丸く外湾する刃部を作出する特徴を有するが、このタイプの打製石斧は本地方の晩期には見られぬもので、その形態から後期ないしはそれ以前の可能性もあり、その時期決定については今後の資料の増加を待って検討したい。

石錐、尖頭状石器、楔形石器、砥石などの出土もみるが、これらは1～2点の出土で極少。中でも尖頭状石器は早～前期の可能性もないでもないが、作りが粗雑であることなどから、楔形石器、石錐同様、後期に編入が可能である。砥石は縄文期とみるより、その特徴から中・近世の疑いもあり、その所属時期については保留するにとどめたい。

次に非実用品としての祭祀用具である石棒と線刻蹠、丸石などが挙げられる。石棒は、その形態から男性性器を形どったものとされ、その用途は「植物栽培や農耕に関係した祭祀に使われたり、狩猟に関係した祭祀に用いられたとする説や、両者を含めて大地の恵みに感謝する生産活動全体に関わる儀礼として位置付けようとする考え方⁽⁴²⁾」や、「一方「石棒祭祀の中に石棒自体を火によって淨める行為が行われていたのではないか⁽⁴³⁾」とする見方もあり、その実態解明については十分になされてないというのが現状である。また石棒自体、完形で出土する例は少なく、破損して出土する多くの多い遺物とされている。

本遺跡出土の2個の資料も共に割れた状態で出土し、特に大型品は5つにバラバラの状態で出土し、小型品は熱を受け茶褐色に変色し中央部から折損したものであった。後者の例は既述の石棒を火で淨めた行為のあつたことの証左ともみられる。いずれにしても、これらの石棒は祭祀行為と合わせ本来、配石内に樹立させていたものと考えられ、後者の例にみられる割れ方は、祭祀行為の後、石棒祭祀儀礼にかかる何らかの理由によって意識的に破碎したのではないかと推断する。本遺跡におけるこれらの石棒は、遺跡の性格からして出るべきして出土したという感はないでもないが、本遺跡と同じ配石遺構をみる岩谷遺跡からは、なぜか石棒の出土はない。西南四国を含む本県においても、このタイプの石棒出土例の報はなく、本遺跡が初例であり唯一の資料となつた。時期的には、これらは共に片粒式～伊吹町式のいざれかに伴うと思われるが、どの土器に伴うかについてまでは明確にし得ないまでも、そのタイプからして後期後半に所属することはまず間違いかろう。

良好な配石と多量の後期後葉の縄文土器の出土をみたA-3区より出土した1個の線刻蹠は、扁平な砂岩蹠を素材とし、その研がれた水平面を保つ片面に女人像が線刻されたものである。蹠に女人像の線刻された、いわゆる線刻蹠は、愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡⁽⁴⁴⁾より早くから出土



第178図 他県にみる類似配石遺構と線刻縦

例が知られ、全国的に著名であった。しかし、上黒岩の資料は頭部の表現ではなく肩から下がる長い頭髪と乳房、腰ミノがシャープに線描された図柄で、本遺跡のとは異なり、それらは縄文期でも最古の草創期（今から約12,000年前）とされるものである。今回、本遺跡から出土の資料は縄文後期後葉（今から約3,000年前）のもので上黒岩のものとは約9,000年間の開きを持ち、この時期のものとしては全国初であることが明らかとなったのである。

本遺跡の線刻縦は、頭髪と下半身をおおう着衣の縦線の表現、それに何といっても特徴的のは、下半部中央にゐる小穴で表現された女性器にある。それは左右に陰毛まで描出されリアルである。本線刻縦で際立つのはこの部分で、当時の縄文人も、この個所に最も力を入れ意識的に強調表現したかったのではないか。本資料に見る限り、そのように看取されるのである。実は、本資料にみる陰部描写と全く同一といってよい手法で表現されている線刻縦が環状列石・配石遺構を伴う縄文後期後葉（今から約4000年前）の小牧野遺跡（青森県青森市小牧野、国史跡指定⁽⁴⁶⁾）から1例出土していることが分かった（第178図5）。その資料は、やや分厚な楕円形縦の片面中央に小穴があけられ、これにも左右に大宮・宮崎遺跡の資料同様の陰毛とみられる描写がシャープなタッチで線描されている。この部分に関しては同一といって過言でなく、本資料も大宮・宮崎遺跡と同様の意味を持つものとみて大過なかろう。

以上の線刻縦は祭祀に使用されたものであることは間違いないが、図柄にみる内容からこれは多産と合わせて子孫繁栄を祈願する一つのシンボルとして存在していたものと推考する。ただ、今回

の出土によって本地方の縄文後期において、線刻繰の存在する事実が明確とされたことは最大の成果といえ、今後、この時期における精神文化的遺跡の発見がなされた場合は、この種の遺物が伴うことは十分予測され、それを念頭に入れた慎重な調査が必要となろう。次に丸石・文様石であるが、これらは各配石内やその周辺に出土をみたもので、丸石・文様石共に時期的には後期後葉～晩期までの範囲内におさまる。これらの石は、近くの河川で採取されたものであろうが、容易に得られたとは考えられず、当時にあっては日数をかけた探石によって入手したであろうことは想像に難くない。丸石は、縄文時代の信仰に関する有形遺物の中に石棒などと共に取り上げられ、これらは当時の信仰についての情報がシンボル化したものとして既に述べられている⁽⁴⁷⁾。このことからみて、丸石が配石内やその周辺より出土していることがうなづけ、縄文人は配石の石同様、これらも神の対象として意識的に聖域である配石内やその周辺に置かれたものと考えられるのである。

縄文時代・配石遺構

配石遺構は、形の整然としたもの、やや崩れて不定形を呈するものを合わせ19基が検出された。それらの配石は形態の特徴から以下のA類～D類の4類に大別できる。

A類 円環状をなし、内部に石ではなく空間を作るものと、中央部に1～2個の石を配するものをみる（第1・2・3・5・6・11・12・14号配石）

B類 円環状を呈し、内部に石が散在配置される（第9・10・16号配石）

C類 U字状を呈する（第4・13号配石）

D類 環状が崩れた状態を呈し、全体的に不定形（第7・8・15・17・18・19号配合）

以上のD類は、当時の形状をそのまま保っているかについては疑問の残るタイプで、類型として成立するかについてが今後の研究課題として残された。A・C類は総体的に小型で、前者は大きさもまちまちで一定していないが、8基が検出されるなど比較的多く、本類が配石の主体をなす。C類は2基と少ないが、形状は整然としつつあるタイプとして確実に成立する。これらのタイプを他県にみると、既にその検出が明らかで、例えば青森県富ノ沢、岩手県御所野両遺跡⁽⁴⁸⁾（第178図1・2）のものはA類の典型をなし、秋田県鹿角市の大湯環状列石（野中堂・万座遺跡⁽⁴⁹⁾）で検出のG類（横立石を馬蹄形に並べ内部に大小の石を雜然と置いたもの）とされているものは本類のC類にはほぼ該当する。したがって両タイプは、配石遺構としては普遍的なタイプであることが分かる。ただし、西南四国の中谷遺跡⁽⁵⁰⁾からは両タイプの検出はなく意外である。岩谷で主体をなすのは本遺跡で分類のB類（第178図4）で、この遺跡では敷石住居説も出ているくらいである。本遺跡の例は、外周を囲む石が岩谷の整然としているのに比べやや雑然とし、規模もやや小さいなど若干の異なりを見せている。B類も岩手県御所野遺跡（第178図3）の配石群の中に類例が知られ、本タイプの形成も当時にあっては一般的であったことが明らかである。

岩谷遺跡は昭和51年に発掘調査され、縄文後期の配石を伴う四国初の祭祀遺跡であることが明かとなり、その成果については『岩谷遺跡』⁽⁵¹⁾に詳しい。それによると、岩谷の配石は四万十川の支流広見川に沿って帶状に形成され、本遺跡の配石もまた日黒川に沿って見られるなど両者が縄文後期にあるということと合わせ共通性をみることができる。早くから知られていた岩谷遺跡の例から、

本遺跡が発見された直後、一早くここが配石を伴う祭祀遺跡であると判断された。岩谷遺跡の配石からは出土土器分類の第4式（彦崎K I式）の出土があったことから各配石の構築時期が後期中葉にあったことを明らかとしている。そこで本遺跡の配石構築時期であるが、内部より出土した土器を配石別に記したのが第70表である。表は第4 A類から第6 B類へと順次編年的に記したもので、第4 A類が最も古く、第6 B類が最も新しい時期ということになる。表に見る限り、本遺跡における配石構築の初現は平城I式が示す後期中葉にあり、第10号配石ということになる。次の後期後葉片鉢式期を迎える、配石は一挙に増加し、第10号がそのまま引き継がれているもの新たに第2・6・9・11・12・16号と7基の出現を見る。次の広瀬上層式期には、第10・11・12号が引き継がれ、第14・15号の2基が、この時期に新たに出現している。次の伊吹町式期も第10・11・12・15号が先代より引き継がれ、新たな出現を第1・7・13・18・19号と5基が認められる。なお、第2・8・9・16号は広瀬上層式期に空白をみるものの、この時期に復活している。したがって、伊吹町式期には新たに構築されたものを含め13基となり、配石数では最多を誇り、本遺跡における配石祭祀の最盛期にあったことを示す。

第4 E類は第9・11・12・15・16号配石に出土しているが、これらは第4 A類～第4 D類までの各式土器に伴うもので、第9号からのものは第4 B、D類に、第11号は第4 B・C・D類に、第15号は第4 C・D類に、第16号は第4 B・D類の各式土器に伴うものである。第5 A類～第5 C類は、第5 C類に一部先行型式土器に伴うものを若干含むものの、これらは一括第4 D類伊吹町式の次に編年位置付けされ、大宮・宮崎K式と型式設定されたものである。本式土器の出土は第8・9・10・11・12・13号に見られる。この内、第7・8・9・10・12号は先代より継続され、第11・13号も資料はやや弱いものの先代から引き継がれたものとみなされる。この時期に配石祭祀の衰退を示すのであろうか第1号～第7号、第14号～第19号には土器の出土をみず、その祭祀の形跡をみない。さらに晩期にはそれを強め、出土土器をみるのは第9号と第10号の2基のみとなっている。前者には中村I式とII式を出土し、晩期の中葉～後葉へと引き継がれているが、後者は中葉が空白で、後葉に復活したことを示す。

以上、配石内から出土した土器に見る限り、配石構築の初現を平城I式が示す後期中葉とし、盛期は後葉の片鉢式、広瀬上層式、伊吹町式期にあり、中でも最盛期を示すのは伊吹町式期であったことは明白である。特に第9・10号配石は、第70表で明らかなとおり祭祀のかかわりが長く、前者は片鉢式期から始まり、次の広瀬上層式を欠く他は伊吹町式、大宮・宮崎K式、中村I式、中村II式と5型式土器を出土し、後者は晩期中葉中村I式を欠落する他は初現期の平城I式、片鉢式、広瀬上層式、伊吹町式、大宮・宮崎K式、中村II式と6型式土器の出土をみる。これらのうちでも両者にみる土器は伊吹町式が最も多く既述の最盛期がこの時期にあったことと一致する。第9号と第10号配石が最も機能的に長かったことが既述のとおり明らかとなつたのであるが、ただ、本遺跡では発見時にA-2区・A-3区より多量の遺物が拾い上げられていることである。これらは配石内とその周辺より出土したものであることは冒頭に述べたとおり確かであるが、どの遺物がどの配石内からどのような出土状態で、どの量出土したかについては遺憾ながら不明である。

第1号～第8号にみる良好な配石遺構内には遺物の出土量が少なく不自然である。これらの配石

大宮・宮崎遺跡配石遺構出土土器一覧表（第70表）

土器形式 配石No.	第4 A類 平城 1式	第4 B類 片 柏式	第4 C類 広額上唇式	第4 D類 伊吹町式	第4 E類 口縁・脚跡文	第5 A類 口縁内面凹線文	第5 B類 外面斜線文	第5 C類 無	第6 A類 中村 1式	第6 B類 中村 2式
第1号配石				○						1
第2号配石		○		○						2
第3号配石										
第4号配石										
第5号配石										
第6号配石		○								
第7号配石				○						
第8号配石				○		○				3
第9号配石				○	○	○	○	○	○	7
第10号配石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8
第11号配石	○	○	○	○	○	○	○	○		5
第12号配石	○	○	○	○	○	○	○	○		6
第13号配石					○			○		2
第14号配石				○						1
第15号配石				○	○	○				3
第16号配石				○	○	○				3
第17号配石										
第18号配石					○					
第19号配石					○					1
	1	8	5	13	5	3	3	4	1	2

内には、本来、多数の遺物でおおわれていたものと考えられるのである。本地区で採集された遺物位置が明らかになるとすれば、第1号～第8号配石の機能度に変更の生じることは論を待たないであろう。その意味から無記録で取り上げられた遺物については良好な資料を多く含むことと合わせ無念さが残るのである。ちなみに、A-2区・A-3区で採集された土器については、最も多いのが第4D類伊吹町式で、次いで第4B類片舟式と続き、大宮・宮崎K式、第4C類広瀬上層式、第4A類平城I式となっている。このことより、本地区的配石も、その機能度の最も高かったのは第4D類伊吹町式期であり、第4B類片舟式にあったことが推察としてゆるされるであろう。

さて、本遺跡には配石19基の構築が明らかであるが、岩谷遺跡の例から、この地が祭祀の場であったことは明白である。縄文時代の人々は石を生命の源として生命の帰る占里と考え、靈魂の宿る所と理解していたであろう。⁽³²⁾ すなわち配石を構成する石は、神が降りてきて留まる神の依り代であり磐座であったとみてよい。したがって本遺跡の配石群は人工による大規模な磐座であり、石に宿った神靈の力を自分のものとし、石信仰ともいえる祭祀行為が配石群を中心とし繰り広げられていたことが推断でき、いわば配石内は神の宿る聖域であったといえるのである。縄文後期に突然ともいえる配石遺構の出現を見るが、これについては「当時の冷涼化の中で、社会そのものが不安定となつた。つまり、冷涼化が引き金となって起こった混乱の中から信仰心を高揚させ組石遺構、土偶の出現を見るに至った」⁽³³⁾と考えられている。本地域においても上述の件が背景にあったことは十分に考えられないでもない。しかし、本地域においては縄文期を通じ、この時期が最も遺跡が多く、巨大貝塚の形成や大規模集落をみると繁栄の様相を見せていているのである。

遺跡数の増加は、人工増につながり、社会的に複雑化させていたものと考える。その中から起ころ、たとえば食生活に関する資源の確保・獲得、それに集落全体の平安、地震、風水害など自然現象からくる恐怖・不安など諸々の要因の中から本地域の配石遺構は発生をみたものとも推察されるのである。もちろん、配石遺構形成の背景には東日本からの文化波及なしには語れないのであって、その地方からの影響下のもとに成立したことは論述するまでもない。

岩谷遺跡における配石内で祈ったことは「広見川の豊かな漁獲にちなんで、水神への感謝と来る年への豊漁の祈り、また現代に行われている水神祭や各地に見られる川開きや鮎漁解禁行事などの先例に当る祭事が行われていたのかと思われる」⁽³⁴⁾と述べられ、配石は「毎年一定期の祭りの慣行が催され、その度ごとに大小の石を集め組合わせ、柱状の石を立てたり、神木を立てて水神、天神に祈り、さらに初犧物を供え御神火を燃やし互の幸を祝福したとの想像もできる」とも記述されている。まさに本遺跡においても、前述のような祭祀行為が行われていたことは想像に難くない。岩谷遺跡では焼石と火を灯した跡（焼土）などの出土をみると、本遺跡では岩谷ほどでもないが焼石を第10号配石内で確認できた。この場では岩谷で述べられているとおり神火が灯され、配石の周りに縄文人が車座となって神事が行われていたことが想定される。さらに出土石器の石鏃、石鍼の如きは山、川の獲物に対する豊穣、豊漁祈願を意味し、その収穫に対する感謝祭が行われてきたことを物語るものであろう。また、土器にも靈が宿していると信じていたらしく、その破片も神に供献されたものと思われ、本遺跡に出土の多量の土器片は、それを傍証するものである。他に石斧、叩石、磨石、石皿、石材核、スクレイバーなどは、生産活動全体に関する大地の豊饒を祈る祭祀を

意味する。線刻疊と石棒については既述のとおり、前者は女性表徴としての凹み穴が強調され多産と子孫繁栄、後者は生殖にかかわる男性祭式や狩猟、漁撈など男性世界に関わる生産活動の祭祀に用いられたものと考えられるのである。以上の祭祀の他、当地は石器製作場としても機能していたことが多数の石材核、剥片から知られるのであるが、それも良好な石器の量産にかかわる感謝の気持を、この地に祈願した結果ではなかったかと推測する。配石内に石材核が組み込まれたり、内部より出土しているのはそれを意味するものであろう。もちろん原形をとどめる1個のサヌカイト製石材核も神に捧げられたものと考えられる。そして、この地が石器製作場となり得たのは、原石となる良質の頁岩が目黒川流域に転石として多数散在することによる。

以上のように神の聖域として本遺跡は存在するが、その聖地を選定するには縄文人は多角的な見地から定めたと思われる。当地を選んだその理由として、まず①縄文遺跡の多い西南四国のはば中心地に所在する。②当地は日当たり良く日照時間が長く、また増水時でも水没しない。③目黒川流域に配石を築くための円疊が豊富にみられ、特に多数の花崗岩疊に恵まれている。④幾筋もの谷が当地に集中しみられる。などが挙げられる。これらの諸条件を具備しているからこそ、この地を選んだものと推察する。中でも、特に注目されるのは「縄文期の配石遺構の立石は、かならず花崗岩など斑晶のある石を選定している⁽³⁰⁾」ということである。これを満たすのは正に③であり、これこそ当地を選定するのに縄文人は最も魅力を感じたことと思われる。本遺跡の配石に使用された疊は綾て河原石で、その石質は全体の約60%が花崗岩で占められていた。縄文人は花崗岩に一種独特の靈力を感じ、神が宿っていると信じていたのかもしれない。本遺跡の配石にみる花崗岩の占める割合の多いのは縄文人が意識的に選定し持ち運んだことに他ならない。

本遺跡での祭祀は岩谷遺跡同様、年に何度か日を定め行われていたことと思われる。そして、この地は四国西南部に集落を形成する各集団の共同祭祀場であったのであろう。したがって、本遺跡は祭祀の場そのものであり、日常の生活場としての集落は形成されてなかったと考えられるのである。ここには祭祀が行われる都度、目黒川より石を運び込み、配石内に置かれ、また、新たな配石も築かれていたことであろう。その祭祀は後期中葉～晩期後葉まで続き、その間、今日にみる配石の規模に徐々にではあるが拡大されていったものと思われる。

実は、本配石遺構の背後に続く平地の発掘調査が既に実施され、調査の成果報告がなされているが、その調査では縄文期の住居跡は発見されていない⁽³¹⁾。このことは祭祀に関わる縄文人の住居が近くに存在しなかったことの証左ともなろう。また、本遺跡に接続する下流域においては、ほ場整備で掘削された面に数基の配石遺構の検出が確認できたが、これは時期的に本遺跡のより古く後期前葉に属するものであった。この際の踏査でも住居跡の確認はできなかった。これらより考えて、この近傍には集落の形成はなかったとみられる。ただ、その下流域の本格的発掘調査はこれからで、まだ行われていない。その調査によっては司祭者や呪術者（シャーマン）の住まいを含む住居跡の検出も期待できないでもなく、それらの有無についてが今後の発掘調査にかかっているのである。

なお、今回の発掘調査で検出された本遺跡の祭祀（配石遺構）場跡は、村おこしや活性化を図る資源とし、また生きた歴史学習体験の場として将来活用されることを期待し、現在、仮の建物で覆い現地に保存されている。この遺跡が永久保存されることとなれば県下初のモデルケースとして脚

光を浴びることはもちろん、全国的にも注目されるものになると考えている。終わりにあたり、発掘調査に終始激励いただいた当時の大宮区長竹葉伝、田辺建設社長田辺宣秀両氏、並びに地元の岡山敬子、前田静男両氏、特に調査にあたり格別のご協力いただいた地主の竹葉景光、岡村勝行両氏に深甚な感謝の意を表する次第である。

註

- (1) 岡本健児「高知県縄文式土器型式編年論」『高知県史考古編』昭和43年
- (2) 山本哲也・廣田佳久・下村公彦『宿毛貝塚発掘調査報告書』高知県教育委員会、昭和61年
- (3) 木村剛朗「間崎遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
- (4) 曾我貴行『国見遺跡』中村市教育委員会、平成6年
- (5) 犬飼徹夫『狩獵・漁撈の生活と文化』『愛媛県史原始・古代I』昭和57年
- (6) 木村剛朗「平城貝塚」『四国西南沿海部の先史文化、旧石器・縄文文化』幡多埋文研、平成3年
- (7) 木村剛朗「曾我の西遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
- (8) 前田光雄『尻貝遺跡』高知県大月町埋蔵文化財調査報告書第1集、大月町教育委員会、平成3年。木村剛朗「尻貝遺跡」『四国西南沿海部の先史文化、旧石器・縄文文化』幡多埋文研、平成3年
- (9) 木村剛朗「縄文後期の生活と文化」『四国西南沿海部の先史文化、旧石器・縄文文化』幡多埋文研、平成3年
- (10) 註(9)に同じ。
- (11) 出原恵三・松田直則他『船戸遺跡』一中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書II－高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集、高知県教育委員会、平成8年
- (12) 註(6)に同じ。
- (13) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県片柏遺跡』高知県文化財調査報告書第19集、高知県教育委員会、昭和50年
- (14) 註(6)に同じ。
- (15) 註(11)に同じ。
- (16) 木村剛朗「初崎遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。「初崎遺跡」『四国西南沿海部の先史文化、旧石器・縄文文化』幡多埋文研、平成3年
- (17) 西田栄・犬飼徹夫・十亀幸雄他『岩谷遺跡』岩谷遺跡発掘調査団、広見町教育委員会、昭和53年
- (18) 岡本健児・木村剛朗『新土居の遺跡と遺物』葉山村教育委員会、昭和51年
- (19) 出原恵三『西分増井遺跡発掘調査報告書』春野町教育委員会、平成2年
- (20) 松本健朗『天岩戸岩陰遺跡』『菊池川流域文化財調査報告書』熊本県教育委員会、昭和53年
- (21) 木村剛朗「いわゆる広瀬上層式土器について」『考古学ジャーナル』No.102、昭和49年
- (22) 岡本健児『高知県広瀬縄文遺跡の調査』『高知県文化財調査報告書第13集』高知県教育委員会

- 会、昭和38年
- (23) 註¹⁹に同じ。
- (24) 高知県教育委員会『田村遺跡群』第1分冊、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、昭和61年
- (25) 犬飼徹夫「II縄文時代—縄文時代遺跡解説」「愛媛県史資料編・考古」昭和61年。「西南四国の縄文土器型式研究の現状と問題点—伊吹町式上器を中心として—」『遺跡』第34号、平成5年
- (26) 註²⁰に同じ。
- (27) 註²¹に同じ。
- (28) 註²²に同じ。
- (29) 牧尾義則・後藤一重他『野津川流域の遺跡VI、内河野遺跡』野津町教育委員会、昭和60年
- (30) 木村剛朗「中村貝塚」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年
- (31) 高橋信武『三反田遺跡発掘調査概報』直入郡教育委員会、昭和60年。坂本嘉弘『菅生台地と周辺の遺跡X』竹田市教育委員会、昭和60年。高橋徹『菅生台地と周辺の遺跡XI』竹田市教育委員会、昭和61年
- (32) 木村剛朗「有岡ソグロ橋下遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年
- (33) 西土佐村文化財保護審査会会長、今城宗久氏により発見され、氏の所蔵資料中に含まれている。
- (34) 片岡鷹介「高知県高岡郡窪川町仕出原出土の注口土器」「あるかいあ」3号、昭和38年
- (35) 木村剛朗「庄司ヶ市遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年
- (36) 木村剛朗「下益野A地区遺跡」「四国西南沿海部の先史文化、旧石器・縄文文化」幡多埋文研、平成3年
- (37) 註²³に同じ。
- (38) 犬飼徹夫「波方港海底遺跡」「愛媛県史資料編・考古」愛媛県、昭和61年
- (39) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『三里遺跡』中村市教育委員会、昭和53年
- (40) 木村剛朗「縄文後期～晩期の生活と文化」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年
- (41) 註(30)に同じ。
- (42) 註(32)に同じ。
- (43) 神奈川県立埋蔵文化財センター『謎の敷石住居』平成8年
- (44) 山本暉久「柄鏡形（敷石）住居と石棒祭祀」「縄文時代」第7号、縄文時代文化研究会、平成8年
- (45) 江坂輝彌・岡本健児・西田栄「愛媛県上黒岩岩陰」「日本の洞穴遺跡」昭和42年
- (46) 文化庁主任調査官岡村道雄先生のご教示により、資料は青森市教育委員会より提供を受けたものである。
- (47) 上野佳也「考古学よりみた宗教史—縄文時代の信仰—」「季刊考古学第2号」特集神々と仏

を考古学する。雄山閣出版、昭和58年

- (48) 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会『縄文時代の集落と環状列石－シンポジウムⅠ・資料』平成9年
- (49) 朝日新聞社「大湯環状列石」『戦後50年古代史発掘総まくり』平成8年
- (50) 註⁴⁸に同じ。
- (51) 註⁴⁷に同じ。
- (52) 美濃晋平『笛の文化史』第2号、和泉村教育委員会、平成8年
- (53) 註(47)に同じ。
- (54) 註⁴⁷に同じ。
- (55) 註⁴⁷に同じ。
- (56) 江坂輝彌『日本文化の起源』講談社現代新書、昭和42年
- (57) 出原恵三『大宮・宮崎遺跡Ⅱ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第2集、西土佐村教育委員会、平成10年

図 版 編



(1) 大宮・宮崎遺跡全景（中央テント左側、手前は目黒川）

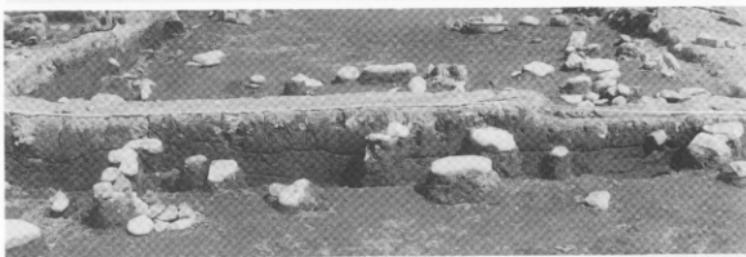


(2) 発掘調査風景

PL. 2



(1) 基準的層序 (B - 4 区南壁)



(2) 基準的層序 (A - 1 区南壁)



(3) A - 3 区東側地点掘り下げ最深部礫層確認状況



(1) C - 4 区の備前焼
擂鉢片出土状況



(2) C - 4 区の備前焼
擂鉢片出土状況



(3) A - 3 区の第 5 B 類浅鉢
口縁部片出土状況



(4) A - 1 区の第 4 D 類
深鉢口縁部片出土状況

PL. 4



(1) B-3 区の第4D類深鉢口縁部片出土状況



(2) B-3 区の第4D類深鉢口縁部片出土状況



(1) A - 3 区の第 4 D 類深鉢
胸部片出土状況



(2) A - 3 区の第 4 B 類
浅鉢口縁部片出土状況



(3) A - 3 区の第 4 E 類深鉢
口縁部片出土状況

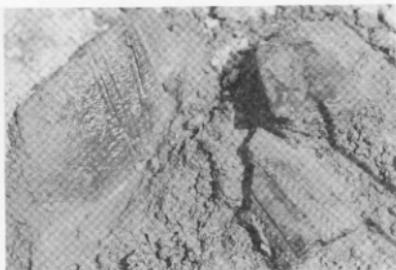


(4) A - 3 区の第 4 B 類
深鉢口縁部片出土状況

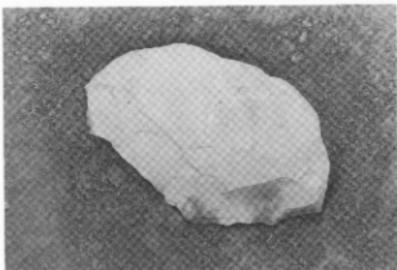
PL. 6



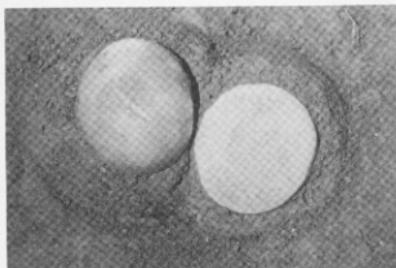
(1) A - 3 区の第 4 B 類浅鉢
口縁部片出土状況



(2) B - 3 区の第 4 A 類深鉢胴部片 (右下)
第 4 C 類深鉢胴部片 (左上)
出土状況



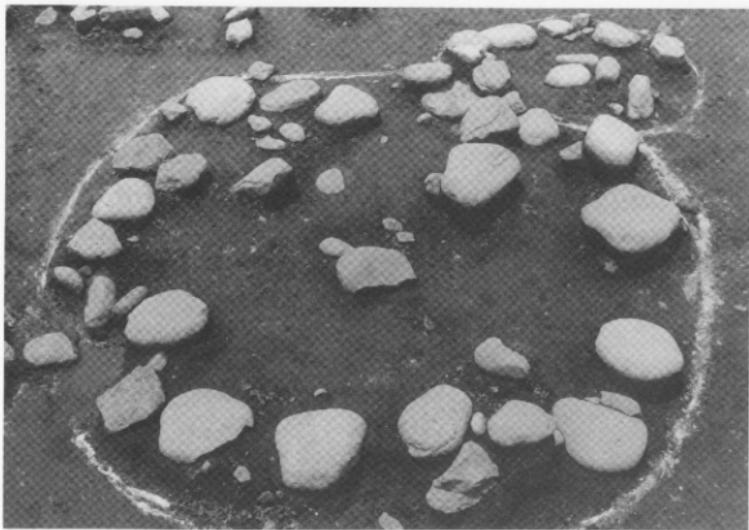
(3) C - 5 区の石材核
出土状況



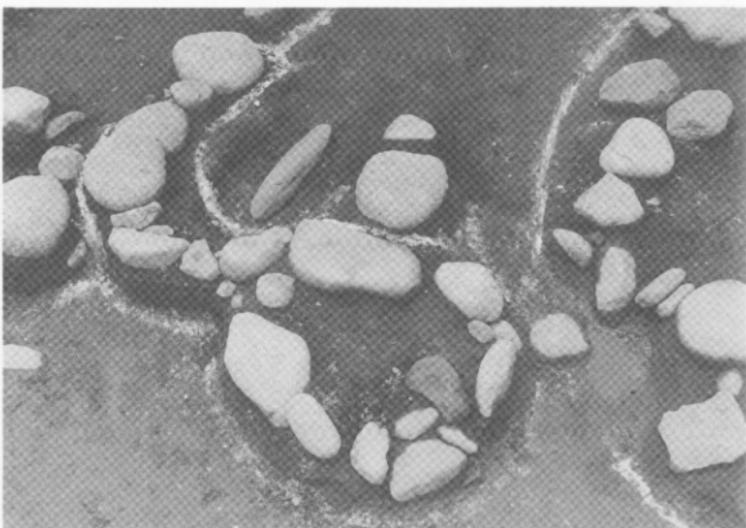
(4) A - 0 区の磨石・叩石
出土状況



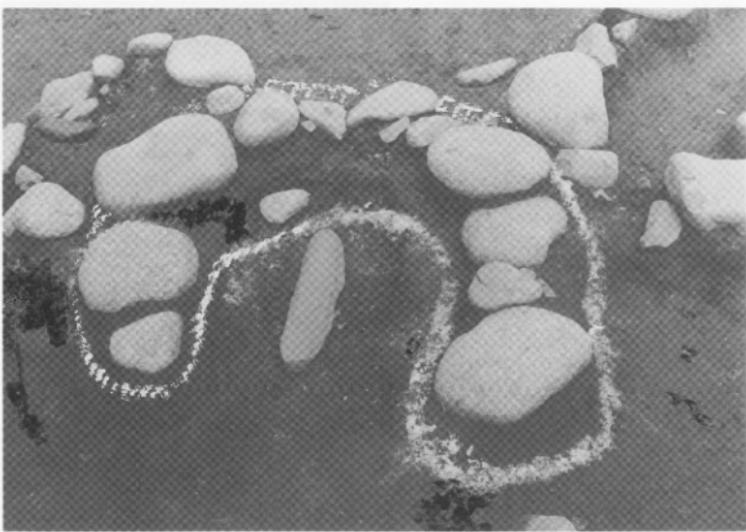
(1) A - 2 区検出の第 1 号配石遺構 (東方から)



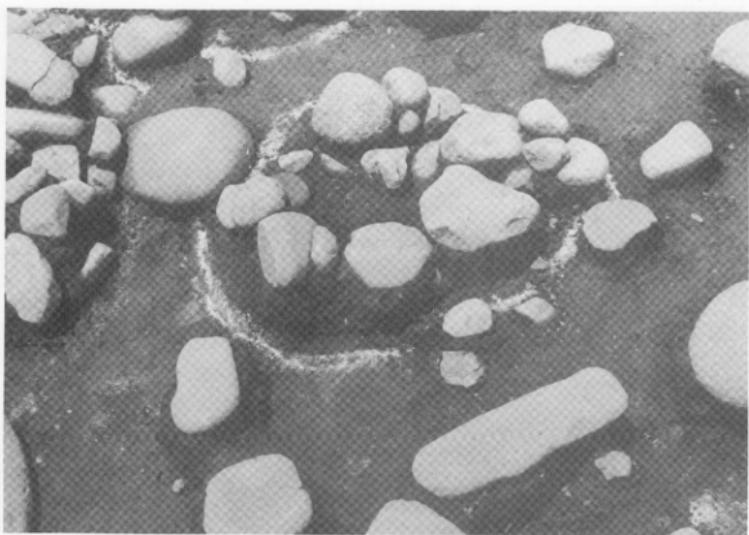
(2) A - 2 区検出の第 2 号配石遺構 (東方から)



(1) A - 2 区検出の第 3 号配石遺構・中央 (東方から)



(2) A - 2 区検出の第 4 号配石遺構 (西方から)



(1) A - 3 区検出の第 5 号配石遺構 (東方から)



(2) A - 3 区検出の第 6 号配石遺構 (北方から)



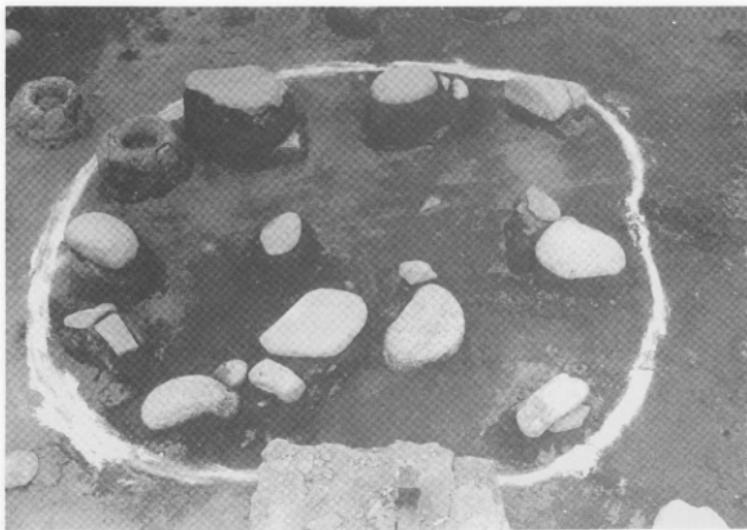
(1) A - 3 区検出の第 7 号配石遺構 (東方から)



(2) A - 3 区検出の第 8 号配石遺構 (東方から)



(1) A - 4 区検出の第 9 号配石遺構 (東方から)



(2) B - 2 区検出の第 12 号配石遺構 (南方から)

PL. 12



(1) A - 4 区検出の第10号配石遺構（東方から）



(2) 第10号配石遺構内に出土の焼け石（中央扁平磚）

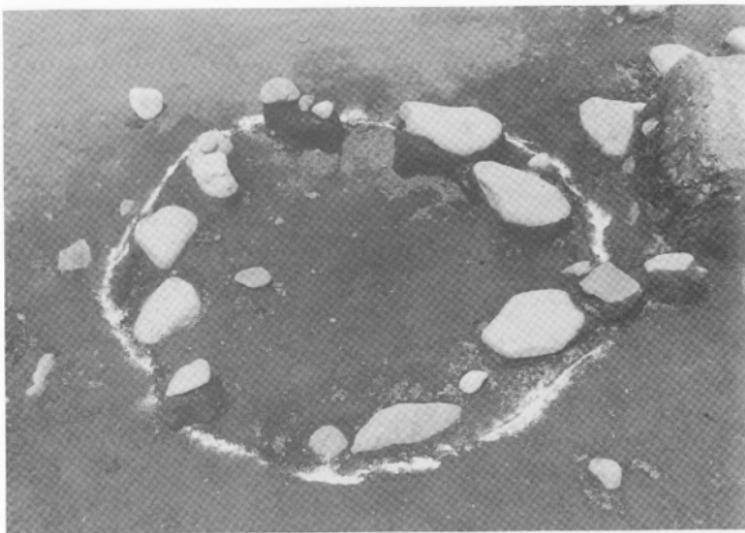


(1) B-3区検出の第13号配石遺構（北方から）



(2) 第13号配石遺構周辺の疊石出土状況（北方から）

PL. 14



(1) B-5 区検出の第14号配石遺構 (南方から)



(2) B-5 区検出の第16号配石遺構 (東方から)



(1) C-2 区検出の第17号配石遺構（南方から）



(2) C-3・4 区検出の第18号（左上）、第19号（左下）配石遺構（北東から）

PL. 16



配石造構全景（西方から）



配石遺構全景（南方から）



配石遺構中心部近景（南方から）